

下伊那郡鼎町天伯A遺跡

——縄文中期集落址・方形周溝墓・古墳——

昭和 50 年度

長野県下伊那郡鼎町教育委員会

序

このたび、鼎町では、町立保育所の設置を計画し、その用地を天伯A遺跡・天伯古墳のある地域に求めざるを得ないことになった。

この地域は遺跡が多く、すでに先年、中央道開通のために山岸遺跡が発掘され、たまたま今年は、その隣地である天伯B遺跡が、やはり中央道開通のため、中央道遺跡調査会によって、発掘調査が進められていた。

保育所の予定地である天伯A遺跡は、すでに荒廃されていて、調査の価値がないのではないかという声もありました。しかし、県登録もされており、実地踏査していただいた。今村善興県教育委員会指導主事の指導助言もあり、行政が進んで文化財の保護の範を示さなければ、文化財や自然破壊はますます進行していくだろうという、社会的責任と保護の重要性に鑑み、鼎町教育委員会の直営事業として、発掘調査を行い、記録保存に努めることにした。

調査の結果は、この報告書にみられるように、当初の一般の予想に反して、極めて多くの住居址と土器類の発見をみるとともに、学術上も貴重な資料が得られたことは、この事業の成果のきわめて大きいことを思い感激にたえない。

この調査にあたっては、隣地の天伯B遺跡発掘を進められていた、中央道遺跡調査会の絶大な御指導と御協力をいただいた。とくに今村善興先生・遠那藤麻呂先生・今村正次先生・片桐孝男先生には、休日を返上して、献身的な御協力をいただいたことは、感謝にたえない。

また、今回の発掘調査にあたって、直接作業にあたっていただいた切石地区の方や役員各位、下伊那教育会考古学委員会、鼎中学校郷土クラブの生徒諸君など多くの関係された皆さんに、深く敬意を表し、厚く御礼申しあげます。

昭和 50 年 3 月 20 日

長野県下伊那郡鼎町教育委員会教育長 下 島 節

例　　言

- 1 本調査は鼎町教育委員会が直営事業として行ったものである。
- 2 本書は鼎町立保育園建設に伴う天伯古墳及び天伯A遺跡の発掘調査報告書である。
- 3 本書は報告書作成に制限があり、調査結果については充分な検討がとれなかつたため、調査によって検出された遺構・遺物などをできる限り図示することに重点をおいて編集した。
- 4 住居址出土の土器拓本は紙数の関係よりはぶかざるをえなかったが、その他の遺物はできるだけ図示してある。
- 5 遺構の絵図は片桐孝男、土器拓本は今村正次、土器実測は進那が担当し、石器の実測は片桐、絵図は進那が担当した。
- 6 土器の復元は中央道調査団訓沢幸一氏を頼わした。
- 7 遺跡の調査は主として今村・進那が分担した。
- 8 編集は進那があたった。
- 9 出土遺物及び図面類は鼎町教育委員会に保存・管理されている。
- 10 遺構・遺物の実測図の縮尺については図示してある。

目　　次

<p>序 例　　言 目　　次</p> <p>I 鼎町の概況 1. 鼎町の地理 2. 鼎町の遺跡</p> <p>II 調査結果 1. 天伯A遺跡の遺構と遺物</p>	<p>2. 繁文時代早期の遺物 3. 繁文時代中期の遺構と遺物 4. 弓生時代の遺構 5. 古墳時代の遺構と遺物 6. 遺構外出土遺物</p> <p>III まとめ 調査組織 おわりに</p>
---	--

挿　　図　　目　　次

<p>第1図 天伯A遺跡構配図並び住居址床面高差図</p> <p>第2図 天伯A遺跡1号・2号・3号住居址実測図</p> <p>第3図 天伯A遺跡4号・5号住居址実測図</p> <p>第4図 天伯A遺跡6号・7号住居址実測図</p> <p>第5図 天伯A遺跡8号・9号・10号住居址実測図</p> <p>第6図 天伯A遺跡11号・12号・13号・14号住居址実測図</p> <p>第7図 天伯A遺跡15号・16号住居址実測図</p> <p>第8図 天伯A遺跡17号・18号住居址実測図</p> <p>第9図 天伯A遺跡土器1号～19号実測図</p> <p>第10図 天伯A遺跡方形周溝墓実測図</p> <p>第11図 天伯A遺跡1号～2号墳実測図</p> <p>第12図 天伯A遺跡1号～3号住居址出土土器実測図</p> <p>第13図 天伯A遺跡3号住居址出土土器実測図</p> <p>第14図 天伯A遺跡5号～7号住居址出土土器実測図</p> <p>第15図 天伯A遺跡9号～13号・15住居址出土土器実測図</p> <p>第16図 天伯A遺跡16号・18号住居址及び天伯1号墳出土土器実測図</p> <p>第17図 天伯A遺跡出土土器拓影</p> <p>第18図 天伯A遺跡出土土器拓影</p> <p>第19図 天伯A遺跡出土土器拓影</p> <p>第20図 天伯A遺跡出土土器拓影</p> <p>第21図 天伯A遺跡出土土器拓影</p> <p>第22図 天伯A遺跡出土土器拓影</p> <p>第23図 天伯A遺跡1号・2号住居址出土石器実測図</p>	<p>19</p> <p>20</p> <p>21</p> <p>22</p> <p>23</p> <p>24</p> <p>25</p> <p>26</p> <p>27</p> <p>28</p> <p>29</p> <p>30</p> <p>31</p> <p>32</p> <p>33</p> <p>34</p> <p>35</p> <p>36</p> <p>37</p> <p>38</p> <p>39</p> <p>40</p> <p>41</p>
---	---

第24図 天伯A遺跡3号・4号・5号住居址出土石器実測図	42
第25図 天伯A遺跡5号・6号住居址出土石器実測図	43
第26図 天伯A遺跡6号・7号住居址出土石器実測図	44
第27図 天伯A遺跡7号住居址出土石器実測図	45
第28図 天伯A遺跡8号・9号・10号住居址出土石器実測図	46
第29図 天伯A遺跡10号・11号住居址出土石器実測図	47
第30図 天伯A遺跡13号住居址出土石器実測図	48
第31図 天伯A遺跡15号・16号住居址出土石器実測図	49
第32図 天伯A遺跡16号・17号住居址出土石器実測図	50
第33図 天伯A遺跡17号・18号住居址出土石器実測図	51
第34図 天伯A遺跡19号住居址・土被出土石器実測図	52
第35図 天伯A遺跡遺構外出土石器実測図	53
第36図 天伯A遺跡遺構外出土石器実測図	54
第37図 天伯A遺跡遺構外出土石器実測図	55
第38図 天伯A遺跡遺構外出土石器実測図	56
第39図 天伯A遺跡出土土偶実測図	57
第40図 天伯A遺跡出土土製品・石製品実測図	58
第41図 天伯A遺跡出土土製円板拓影	59
第42図 天伯A遺跡出土石器実測図	60

図版目次

図版 1 天伯A遺跡遺景、1号・2号・3号住居址・出土遺物	61
図版 2 天伯A遺跡4号・5号住居址・出土遺物	62
図版 3 天伯A遺跡5号～11号住居址・出土遺物	63
図版 4 天伯A遺跡7号～10号住居址・出土遺物	64
図版 5 天伯A遺跡11号～13号住居址	65
図版 6 天伯A遺跡15号・16号住居址・出土遺物	66
図版 7 天伯A遺跡17号・18号住居址・出土遺物	67
図版 8 天伯A遺跡方形周溝墓	68
図版 9 天伯A遺跡1号墳・2号墳	69
図版10 天伯A遺跡住居址群・調査スナップ	70

表 目 次

第1表 天伯A遺跡土壠計測表	5
第2表 天伯A遺跡遺構別出土石器一覧表	5

I. 鼎町の概況

1. 鼎町の環境

鼎町は、長野県の南部地域、下伊那郡のほぼ中央にあり、天竜川流域飯田盆地の中心旧飯田市と、飯田松川（以下松川といふ）をはさんで南側している。松川の氾濫原である沖積地上の切れ下段。上茶屋、中平、西原、東原、この上段に上山・切石段丘、さらにはこの上に矢高原・名古熊原・一色原と各段丘面が続き、飯田市伊賀良の殿岡、北方面へと続いている。町の面積やく6.2km²東西は長い所で3.3km、南北は長い所で2.9km、短い所で10.3kmで、松川上流の妙琴原公園を頂点とする長三角形状の町で、人口やく12,700人を数える。この地は古くは伊賀良庄の一部に含まれ、中世末は松川小笠原氏の支配下にあつたらしい。江戸時代には山村・一色村・長熊村（名子熊村）の3か村であった。明治3年上村が、上山村、下山村に分離したことでもあったが、すぐ復した。明治8年この3か村が合併し鼎町となり、明治14年故あって鼎村と稻井村とに分離したが、明治22年に再び鼎村となつた。その後、昭和29年町制施行して、本年で20周年を迎えている。

下伊那郡から上伊那郡にかけて南北に帯状に続く盆地状の大きな低地が伊那谷で、東に伊那山脈、赤石山脈、西に木曽山脈があつてその中央部を天竜川が横流している。下伊那郡を地形から大別すると、赤石継谷・飯田盆地・西部及び南部山地の三地区になっている。飯田盆地は、北は上伊那郡の松川町から、南は飯田市の南部天竜峡までの絶長い盆地で、この盆地の中心は飯田市飯田と鼎町周辺である。伊那谷の南部山地、とくに飯田付近においては、河岸段丘の発達が日本屈指といわれている。この地域の段丘は、新潟や10段の段丘面に区別されているが、南部地域ほど段丘の数が多く古い段丘と新しい段丘が並んで天竜川の上流へいくにつれてその数が減り、新しい段丘だけが発達している。もう一つの特長は、赤石・木曽山脈から押し出された扇状地が各所に発達していることである。飯田松川によって形成された上飯田の坪洞、正永寺原と伊賀北方・大森原の扇状地はその規模が大きい。鼎町の大部分は、段丘・扇状地・松川の氾濫原上に位置すると言えよう。

鼎町は古くから松川に依存することが多かつた。松川は木曾山脈念丈岳（2,290m）、安平路山（2,363m）から発し、井戸付近で天竜川に合流する。総延長やく25.8km、流域面積99.8km²あり、古来伊那谷の一つとされる大支流である。洪積期にこの川の氾濫によって大きな扇状地が形成され、その広さは、北は鳳城山麓の丸山・羽場・飯田の市街地、南は、鼎町全域はもとより、飯田市伊賀良北方・駿河・三日市朝の一部、さらに飯田市竜丘の鶴谷、時又・桐林にまで及んでいる。この大扇状地が形成したこの松川は、天竜川の下流に伴い流量は低下し、かつては自らがつくった扇状地を解消し、側浸食による河岸侵食を形成したもののが、鼎町台地と鼎町の各段丘面である。この解釈のも、左右岸によってその差異が目立ち、左岸の

坂田側への浸食がより多く働き、右岸の西地域に対しては浸食作用と堆積作用の平衡が保たれ自然堤防をつくる作用が働くため、鹿町の生活立地の良さが生まれている。上位段丘山麓には、松川の名残川と見られる毛質河と新川の動きによる新しい段丘地が形成され、それが現在の伊賀良北方の崩壊地である。西町の段丘面は、洪積世のローム層を堆積する一色面、名古熊北原面、新期ロームの堆積を全く矢高原面が中位段丘で、ここから大きな段丘崖によって区別される切石・上山面は沖積台地で砂と粘土を多く含む低位段丘で、やゝ低目の段丘崖によって松川流域冲積低地に接している。湧水も地形の関係から豊富な地域で、切石の西部・西山の山麓から北平段丘崖下、下茶屋の小段丘崖下、上山段丘崖下から矢高原段丘崖下、西町の谷川底等、各所に湧水帯を現し尚相当量の飲料水のほか、工業用水としての利用度が高い。加えて、松川からの引水の歴史は古く、伊賀良井を基幹とする天王井・男女川井・島田井のほか10数条の井筋が、東西に傾斜地形を利用して流れ、水利の恩恵を部分に受ける地域となっている。今回の発掘調査でも用地を横切る2条の用水路は、発掘の障害でもあり、又曰玉発見の洗いの最適の場でもあった。

参考資料	松島信幸 「下伊那地方の段丘」 （今村）
町誌編纂委員会	「鹿町誌」
鹿町役場	「鹿町の統計」

2. 鹿町の遺跡

段丘面と段丘崖に埋まれた鹿町は、地形的に見れば埋文包蔵の多い所と予想される。大正時代の市村成人の資料（下伊那の先史及び原史時代）によると、山洞・天伯・堂垣外・棚原・北平・壹垣・羽場・宮久保・地藏面・地藏堂・矢高原・擴小場遺跡と、10余教の古墳が記載され、この中、一色原・名古熊原の遺跡は相対的広範囲に開拓されている。その後採集された遺物によって、現在32か所の埋文包蔵地と、14か所の古墳が確認されているが、一部の遺跡を除いては、調査が余り進んでいない。地域別に観察すると次のとおりである。

切石地蔵では、山洞（1）・天伯（A5）・天伯B遺跡（2）が昭和45年度と本年度の発掘調査によって、縄文時代中期・弥生時代後期・古墳時代の大墓葬址の一画が確認され、出土遺物を見ると、先土器時代の石器から、縄文時代は、早期から晚期まで各期、弥生時代・平安時代から中世にいたるまで豊富な資料を得ていることから、各期、広範囲にわたる生活舞台であったことを実証している。古墳についても松川に面する段丘崖上に列状に構築されている事実は、西の伊賀良北方段丘上の古墳群と共に、この地の性格を物語っているもので、今後の調査に期待したい地域であろう。

上山地蔵も又思まれた段丘面で、遺跡な分有が予想されるが、確認されたものは、上の平（24）・堂垣外（25）に過ぎない。日向田地蔵で発見した縄文時代の土器・石器や、土器類須恵器はその片りんを示し、その東端、棚原（26）の一部、代田地蔵の町道改修時に発見された勝牌式土器完形出土（仲信夫報告）等注目すべき地域である。水田の多い所であるので保存状態は悪い所と思う。

中位段丘一色・名古熊面では、10余教の包蔵地が確認されているが、調査報告は少ない。しかし、各所で耕作中に遺物出土の例があり、表面探査も可能であるので、今後詳細調査する必要があろう。坂田バイ

バス通過予定地を歩いても各所で遺物の表出可能であり、下伊那農業高校実習地や、羽場地蔵での出土も多い。

矢高原から八幡原にかけては、水利便の悪さで、遺物散布は少なめと考えられていた。所が、矢高原の具頭高校移転新校地の調査の結果、平安時代の遺物から中世陶器片を相当量採取しており、坂田市毛賀南原遺跡での中世遺構検出例に類似するかも知れない。

中平・下山の下位段丘面では、土師器・須恵器の出土地が何か所か報告されているが、詳しくはわからない。最下段の上茶屋、下茶屋あたりで出土があるかどうか調べてみたいものである。（今村）

3. 天伯発掘余録

1) 調査土器

私が教師として坂田中学校へ帰って来たとき、それは昭和12年であったが、歴史地理の研究室の棚に、雑文書・後期（今で考えると後期の加賀利B式もあった）の土器がかなり多く並んでいた。土器のひとつひとつに墨で「天伯」と書いてあって、天伯とはどこであらうかと思って、教頭の北原寛先生におたずねした。歴史とは関係のない北原先生ではあったが、ただちに、「そりゃ切石だと思う」との返事があった。私は天伯の森へ行って見た。この森は、今回の発掘調査の後半のテント設営地となった天伯神社のそこのであった。その時土器片の小さいものを表面探査したような気がするがはっきりしない。

坂田中学生が天伯の調査したことも、今回の発掘調査で時折聞いたが、それは昭和11年以前のことだけは明かであるが、その正確な位置はどこであったのだろうか。誰が塗ったのであらうか。

2) 天伯神社

今回の調査団休憩所としてご厄介になった天伯神社は、立札によるともども、沢良木三郎の氏神であつたがその後衰えていた。そして、明治15年に切石区のお宮として復活したとある。沢良木三郎のこと、伝承にははあるが正しい。史籍には載っていないので私は何とも発言できない。九頭龍社は水の神であることは確かである。天伯神は山の神だとあったが、水の神ではないだろうかとは水野都は生民の言である。天伯という地名も諸所にあり、天伯神社の数も多いので調べてみたら面白いことが判りそうな気がする。

3) 夢代

天伯神社最北の北に宮松川神社が祀ってある。その灯籠は安永4年の作であるが、その竿石に「村中元夢代」と刻まれている。何のことであろうか。私は、昭和15年頃この社が今の喜久水会社近くにあったとき、この燈を見て何の意味かと思い何人かの民俗研究家に聞いてみたが、誰も教えてくれなかつた。元夢代とは何であろうか。大方の士のご教示を得た。ただ道祖神など他村の通中に並まれた時の併置として帶び何質と應てあるものがあるとのことなので、夢代は、昔代の誤りかとも思ってみたが、やはりわからない。

表 I 湖町遺跡古墳一覧

番号	遺跡名	所在地	先土器	國文時代				男生時代	土器	陶器	灰陶	中世	備考
				草	早	中	後						
1	山 庫	切石	*	○	○	○	○	○	○	○	○	○	住居址
2	天 伯	B	*	○	○	○	○	○	○	○	○	○	* 騰祀址
3	山 の 前	*	*		○	○							
4	背 木	*	*		○				○				
5	大 伯 A	*	*	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
6	五 穀 原	*	*						○	○	○	○	
7	宮 の 原	一色	*		○				○	○	○	○	
8	一 色		*		○				○	○	○	○	
9	夏 一 墓	上古墳	*		○				○	○	○	○	
10	田 井 波	上古墳	*		○				○	○	○	○	
11	名 吉 八 墓	*	*		○				○	○	○	○	
12	羽 毛	*	*		○				○	○	○	○	
13	宮 久 墓	*	*		○				○	○	○	○	
14	行 人 墓	*	*		○				○	○	○	○	
15	地 墓	田	*		○				○	○	○	○	
16	地 墓 室	*	油田		○				○	○	○	○	
17	興 学 行 付 近	鶴井	*		○				○	○	○	○	
18	興 学 校 館	*	*		○				○	○	○	○	
19	北 平	名古屋	*		○				○	○	○	○	
20	岡 中 墓	*	*						○	○	○	○	
21	大 森 原	下山	*		○				○	○	○	○	
22	八 嵐 墓	*	*		○				○	○	○	○	
23	筑 小 墓	*	*						○	○	○	○	
24	上 の 幸	上山	*		○				○	○	○	○	
25	堂 墓 外	*	*		○				○	○	○	○	
26	朝 残	中平	*		○				○	○	○	○	
27	中平上の平	*	*						○	○	○	○	
28	黒 川 内	*	*						○	○	○	○	
29	黒 木 墓	*	*		○				○	○	○	○	
30	松 墓	*	*						○	○	○	○	
	風 山	一色											
六	反 田												

2 古墳一覧

番号	古墳名	所在地	施設	副葬品	備考
1	天 伯	1 切石485号の2	切石 便座	鐵刀、菅玉、切子玉、鏡、氣泡土師器	49年発掘調査
2	天 伯	2 切石485号の2	便座	菅玉、土師器	*
3	坂	櫛 切石櫛柄44号の2	櫛	劍、鏡、鏡蓋	
4	大 牛	名古屋市名古屋45号の1	櫛蓋	須恵器	須丘城
5	切 石	切石45号の1	櫛蓋	鐵刀、土師器	
6	宮 の 墓	櫛舟ノ1	櫛舟		
7	西 の 墓	櫛舟外西の原59号の1	櫛舟		須丘城
8	立 墓	坂上(重宝塚)72号			*
9	大 墓(1本松の家)	坂下147号の11			
10	西 の 墓(羽野)	櫛舟羽野375			
11	行 人 墓	櫛舟羽野427			
12	地 墓	名古屋市地藏前169号の3	調査、空露出		須丘城
13	秋 月	名古屋市名古屋1370			*
14	物 是	坂上241	土師器		*

II 調査結果

1. 天伯A遺跡の遺構と遺物

天伯A遺跡は、下伊那郡鹿町天伯神社周辺一帯にあたり、松川の河成段丘上に存在する遺跡である。今回の調査は町立保育園施設に伴うものであり、かって郡史に記されている天伯古墳の存在した所でもあるが、かかる古墳は消滅しておりその正確な位置は不明であった。またこの地帯は縄文時代の遺跡地として古くから知られ県道跡台帳にも登録されている大遺跡であり、郡教育委員会ではただちに調査団を組織し、而今古墳である天伯古墳の正確な位置と規模、縄文時代の遺構などを確認することに主力を注いだのである。その結果、縄文時代住居址20軒、土壙19ヶ所、弥生時代方形周溝墓1基、古墳2基と多くの出土遺物を得たのである。特に新しく古墳1基の存在を知り得た事実は重要視すべき発見であった。今回の調査結果については、充分な分析をしたいと思っていたが却てできなかったので、調査の概要を中心に報告を進めていきたい。

2. 縄文時代早期の遺物

天伯神社社殿裏手、調査区北側段丘先端部より押型文土器がわずかに出土している。当初生活址の存在が推定されたため全面発掘を実施したが、かなり擾乱されており遺構の発見はできなかった。押型文土器は、第40回14~17に示すものであり撚糸文土器と山型文土器であり、小破片の中には横円文も認められ立野遺出の押型文土器と同形式のものである。

3. 縄文時代中期の遺構と遺物

ア) 1号住居址（第2回・第12回・第23回・第41回・第42回）

水路及び1号古墳西側周溝によって切断されているが、直径約6mを計るほぼ円形の堅穴住居址である。炉石はすべて取り除かれているが、かなり大形な炉石であり柱穴も3ヶ所確認できる。南側には埋甕が存在し、埋甕を中心とした床面に接して人頭大の扁平自然石2個が存在する。周溝も東側及び南側では明瞭に認められるが、北側及び西側には部分的に存在している。炉石内部はわずかに焼土が認められ床面は良好である。

遺物 土器・石器・土製品の出土があり、覆土中からの土器は多量なものである。

土器 埋甕（第12回1回）覆土出土の土器（第12回2回）がある。器形を知り得るものはこの2点であるが、埋甕は口縁部の一部と底辺近くを欠損するものである。胴部は底辺全文に認められ埋甕特有の文様模様を示す。同2回はロ繊維で底辺全文を認めるもので、胴部は全文が全面に施文されている胴部以下を欠損するものである。覆土出土の土器片はその種のものが多い。

石器 磨石（23回1回）打石斧（23回2~12回）敲打器（23回13~14回）横刃形石器（23回15~17回）がある。石器（42回1~3回）黒耀石製ドリル（42回4回）大形粗製石ヒ（42回5回）がある。石器1は

安山岩製であり2・3は黒耀石製である。
土製品 土器片利用の土製円板である。

イ) 2号住居址（第2回・第12回・第23回・第24回・第42回）

西側の大部分は道路下のため調査できなかったが、直径約4mほどを計る円形の堅穴住居址で2号址の上面に3号住居址が存在する。周溝は認められず柱穴も3本確認されたのみで床面も良好である。住居址の大部分は未調査である。

遺物 （第12回・第23回・第42回）土器・石器の出土がある。

土器 床面出土（第12回6~7）があり、下伊那地方では類例の少ない土器か一つである。

石器 打石斧（24回18~21）と小形赤色チャートの石ヒ（42回6）がある。

ウ) 3号住居址（第2回・第12回・第13回・第24回・第41回）

2号住居址上に構築されたものであり、西側の大部分は2号址同様道路下のため調査できなかった。南側床面にはさわめて大型な埋甕が存在し、覆土中からの出土は多量な土器片が認められた。住居址は直径約5.5mを計るものであり柱穴2本が確認され、床面も良好である。住居址の大部分は未調査である。

遺物 （第12回・第13回・第24回・第41回）土器・石器・土製品が出土している。

土器 住居址覆土中から出土した土器（第12回3~5）があり、いずれも口縁部に文様帶を集中させている。胴部は弦線を多く施すものである。底部（12回5）は床面出土のものである。埋甕（13回2）はさわめて大型なので口縁部は底辺全文の退化したものであり、胴部は地文に横文を施しその上部より複数な弦線が唐草文式に配されている。

石器 敲打器（24回1回）石斧（24回2~3）この2点は埋甕上面に存在したものである。

土製品 土器片利用の土製円板（41回6）が出土している。

エ) 4号住居址（第3回・第24回）

本遺跡で数少ない単独住居址であり、南北5.5m×東西5mを計る円形の堅穴住居址である。炉石は中央や北寄りに存在し扁平自然石8個を使用する石圓炉である。床面は良好であり、周溝も壁面下を一周し柱穴10本を数える。南側壁はわずかに張り出しており、この部分は炉に対し南側に位置するものであり、從来埋甕が存在する場所には単なるピットが存在し、この周辺部は張り床の部分が多く認められた。なお炉石南の床面に2個の自然石が認められる。

遺物 （第24回）土器・石器の出土がある。

土器 土器類は図示しないが、さわめて多量な土器片の出土がある。主として地方に縄文を施文し弦線を配するものであり、加曾利E期に比定されるものがその中心を占めている。

石器 尖頭器（搶先形石器）状石器（24回4）が出土している。最近いくつかの沼跡でこの種のものが注意されており、本遺跡でも2本の出土が知られた。いずれも硬砂岩製のものであり表裏両面ともに磨滅が認められるが、研磨したもののではない。打石斧（24回5~9）磨石（24回10）石鍬（24回11）横刃形石器（24回12~14）の出土がある。

オ) 5号住居址(第4回・第4回・第24回・第25回・第39回・第41回) 土器・石器・土製品がある。

南北5.5×東西5.3mを計るは円形の堅穴住居址であり、新・旧2回の住居が確認されたものである。旧住居址は小規模なものであり、南北4.4m×東西4.3mを計る。柱穴は4本が認められ、炉址の位置は新・旧住居の場所ともに変わっていないものと推定される。新しくなったからの住居址は比較的大形の住居になり主柱も6本が認められ、炉址は方形石窯である。住居址南側の床面には埋甕が存在し、6号住居址を切断するものである。また柱穴が複数のものが多く、建増・改築を推定されるものである。いざれにせよ本住居址は、なんらかの理由によって建増されたものと考えられる。

遺物 (第4回・第24回・第25回・第39回・第41回) 土器・石器・土製品の出土がある。

土器 埋甕 (第4回) ありわざめて大形なものである。口縁部は大波状口縁をなし、胴部は捺赤が施され沈線が複合される文様構成を示す。底部は穿孔されており、文様帯は口縁部に集中している。この他多量の土器が出土しているが、この種の土器が中心を占めている。

石器 磨石斧 (24回15~17) ありいずれも磨石斧と敲打器を用いるものであり器面には多くの打痕を認められる。刃部は使用痕が認められる。打石斧 (24回18、25回1~9) 直腹大形石斧 (25回10) 横刃石器 (25回11、12) がある。

カ) 6号住居址(第4回・第14回・第25回・第26回)

西側の一部を道路下に埋めるもので、調査できなかつたが、南北6.0m×東西5.6mを計る円形の堅穴住居址であり、大形で深い石窯炉が存在する。炉址は正面の炉石が外されているが大形な扁平石をして使用してあり、炉石西側は石株欠損品で炉址東側床面上に炉石に接して石皿の欠損品が置かれていた。この住居址は5号住居址に切断され、さらに7号址と8号址を切断している。周溝は北側では1本、南側では2本が認められ住居址内には8号址の炉址・柱穴が存在する。南側床面には新・旧2つの埋甕が存在し、西側の外部周溝中に底面を穿孔する胴部上を欠損する円形土器が注意されたが、その性格は不明である。

遺物 (第14回・第25回・第26回) 土器・石器が多量に出土している。

土器 掘堤 (14回1) は新しい時期の土器であり、旧埋甕は底部のみでかなり破壊されており図示することはできなかつた。新埋甕は胴部のみであり、口縁部と底部を欠損するものである。口縁部は渦巻文を配し、胴部は地文に圓文を施し沈線に懸垂文を認めるものである。炉址上面に存在した胴部以下を欠損する土器 (14回2) があり、これは口縁部に渦巻文を認めるものである。また周溝内より出土した底部穿孔の土器 (14回3) である。

石器 打石斧 (25回13~18) 石皿 (25回19~20) で同回19は安山岩製であり、外側には波状の掘込みをもつ文様帯が認められる。磨石 (25回21) 石棒 (25回22) 欠損品である。磨石 (26回1・3) 凹凸 (26回2) 敲打器 (26回4) 石鍬 (26回5) 横刃形石器 (26回6~11) が出土している。

土製品 用途不明品 (40回11・12) がありこれと同種のものが新潟県三仏造跡で発見されている。

キ) 7号住居址(第4回・第14回・第26回・第27回・第39回・第40回・第41回)

6号住居址東側に存在する南北4.5×東西4.9mを計るは円形の堅穴住居址である。7号址は6号址に切断され、10号址が上部に構築されている。炉址は扁平自然石7個をもつ小形な円形の石窯炉である。主

柱穴は6本で周溝も壁下に一周しているが東側の一部は不明である。住居址東側には大きな土塙が存在し住居址を切断している。

遺物 (第4回・第26回・第27回・第39回・第40回・第41回) 土器・石器・土製品などが出土している。

土器 脇部以上を欠損する土器 (14回8) であり住居址覆土面上より出土したもので、住居址とは直接関係ないものである。床面出土の土器 (14回6・7・9) があり、同回7・9は口縁部が強く内側に折れ込み波状口縁を示すもので吸烟土器の底を示すものである。同回6は底部を欠損するが口縁部は無文帶があり、胴部は口縁部の渦巻文が認められる所の間を横筋状の状態でうめている。

石器 敲打器 (26回12) 打石斧 (26回13~15) 磨石斧 (27回1) 打石斧 (27回2~15、17) 横刃形石器 (27回16~18) 敲打器 (27回19) 石鍬 (27回20) が出土している。

土製品 土偶胸飾半欠品 (39回4) 土器片利用の土製円板 (41回8・9) と土器片利用の土器 (40回6) の出土がある。

ケ) 8号住居址(第5回・第28回)

6号住居址によって大部分が切断され、9号住居址が上部に構築されている。また西側は道路下のため未調査である。6号址と9号址の中間部分の床面がわずかに残るものであり、6号址床面に炉址・柱穴の痕跡が認められた。住居址の大きさは約5.5mほどと推定される。

遺物 (28回8) 土器・石器などがわずかに出土している。

土器 土器類はきわめて小量の発見であり正直な時期は不明であるが、6号址と9号址よりも古い時期の所産であることは確実である。

石器 石器類もその量は少ない。磨石斧欠損品 (28回1) 打石斧 (28回2・3) 花崗岩製小形石皿 (28回4) 横刃形石器 (28回5・6) が出土している。安山岩製スクリーハー (42回9) がある。

ケ) 9号住居址(第5回・第15回・第28回)

8号住居址上に構築されたもので南北9.3m×東西4.7mを計る堅穴住居址である。また西側の一部が道路下のため未調査である。炉址はかなりくずれ炉石もほとんどはざされているが円形の石窯炉と推定されるものである。主柱穴は4本が確認され、周溝も壁下に一周している。南側床面には埋甕が存在し、床面にも良好である。

遺物 (第15回・第28回) 土器・石器の出土がある。

土器 埋甕 (15回1) と覆土中から出土した胴部以下を欠損する土器 (15回2) が出土している。埋甕は、粘土組の渦巻文を基面に大きく配し器面は細い沈線が多く認められる。左右に把手が認められるが欠損している。口縁部より底部まで存在するきわめて大形なものである。覆土出土のものは口縁部に追化した渦巻文を配し器面は細い沈線でうめている。

石器 打石斧 (28回7・8) 石鍬 (28回9) 横刃形石器 (28回10) が出土しているが、石器類はきわめて少量化である。

コ) 10号住居址(第5回・第15回・第28回・第29回・第39回・第40回・第41回・第42回)

7号址及び11号址の上面に構築されたものであり、南北4.8×東西5mを計る円形の堅穴住居址である。南側は粘質の黒土でありきわめて多量の土器・石器が出土している。北側には不規形な方形石垣跡であり南側の炉場が取りのぞかれている。柱穴は5本が認められ、周囲は存在しない。この住居址は褐色土中に構築されていたものでサンランの露出には困難をきわめたが、西側は黄色砂質土を振り込みなものであり既にその落成が確認された。床面はよくない。

遺物（第15回・第28回・第29回・第39回・第40回・第41回・第42回）土器・石器・土製品など多量な遺物が出土している。

土器　炉場附近出土のもの（15回3）であり、住居址内から出土したものは、図示した土器と同様なものばかりであり、口縁部に陶文を配し地文に範文をもつものが少い。個体数にすると十数個体分の土器があり、すべて文様構成は統一されている。木張落成の場合もっとも新しい形式に比定されるものであろう。

・石器　磨石斧（28回11）打石斧（28回12～20）石鍬（28回21）礫器（29回1）横刃形石器（29回2～6）が出土している。石鍬（42回10・11）石匕（42回12）の出土がある。

土製品　土器（39回5・6）でいずれも胸部である。用途不明で6号住居址より出土したものと同種のもの（40回13）の出土がある。また土器片利用の土製円板（41回10～13）の出土がある。

サ) 11号住居址（第6回・第29回・第41回・第42回）

10号住居址下部に発見されたもので、南側の一部は地外のために調査できなかった。面積約4.8mを計るはほ円形の堅穴住居址であり、黄色砂質土を振り込んで構築されたもののその縁取り込みも深い。柱穴は比較的小形で扁平自然石を使用する石頭軸であるが、西側の炉場は取りのぞかれている。柱穴は5本が確認されたが、おそらく6本と考えられる。周囲も壁直下を一周している。

遺物（第29回・第41回・第42回）土器・石器・土製品が出土している。

土器　土器類は図示されていないが、主として吸烟系土器がその主体を占め出土量もきわめて多い。

石器　磨石斧（第29回7～9）磨石（29回10）打石斧（29回11～16）横刃形石器（29回17）石鍬（45回13）は黒耀石製である。

土製品　土器片利用の土製円板（41回14～17）の出土がある。

シ) 12号住居址（第6回）

大部分が用地外のため未調査である。14号住居址を切断しており、おそらく円形の堅穴住居址であろう。調査範囲内では周辺及びビットも不明である。床面も良くなかったが14号住居址上や柱穴上を振り床してある箇所上、14号址より新しい住居址である。

タ) 13号住居址（第6回・第15回・第30回・第39回・第41回・第42回）

住居址の一部を方形周溝帯西溝によって切断されている。新・旧2つの住居址があり、旧住居址は、南北3.7m×東西3.5mを計る小規模な住居址である。柱穴4本が存在し周溝も明瞭に認められ、その位置も住居址や北寄りに存在するが、炉場の位置は新・旧とともに変化は認められない。新しい住居址

は、南北6m×東西5.75mを計るほほ円形の堅穴住居址である。柱穴は6本であり南側入口部と推定される部分には、埋戻りが存在する位置に2ヶ所のビットが存在し、さらに柱穴に接して小ビット2ヶ所も認められる。この住居址はなんらかの理由で追増されたものと考えられるものである。炉場は石垣炉と推定されるが、大部分取りのぞかれている。本集落中最も大きな住居址であり、10号住居址下部に存在するものである。

遺物（第15回・第30回・第39回・第41回・第42回）土器・石器・土製品の出土がある。

土器　朝那以下を欠損する吸烟系土器であり前部は沈線でうめられている（15回4）土器と、住居址前面上面より出土した口縁部を欠損する中期初期平皿三類Aの土器（15回5）があるが、後者は住居址と直接関係ない。土器の出土量はきわめて多く、特に吸烟系土器がその主体を占めている。

石器　打石斧（30回1～7）石鍬（30回8～14）礫器（30回15～18）横刃形石器（30回19～23）花崗岩製石皿（30回24）磨石（30回25）の出土があり、黒耀石製石器（42回14～16）スクレーパー（42回17）黒耀石製ドリル（42回18・19）石匕（42回20）が出土している。石器の多量出土に注意する必要があろう。

・土製品　土器製削（39回7）土器片利用の土製円板（41回18～24）が出土している。

セ) 14号住居址（第6回）

大部分が用地外のため未調査であるが、12号住居址によって切断されるものである。調査によっては周溝と柱穴1本が確認されたのみである。この住居址は円形プランの堅穴住居址であろう。また出土土器は少量の吸烟系土器が発見されている。

ソ) 15号住居址（第7回・第15回・第30回・第31回・第41回・第42回）

長方形の堅穴住居址で南北4.5m×東西5.3mを計るものでの主軸を東西にもつものである。炉場も東側に長い長方形石垣炉で、炉場中央部に口縁部と底部を欠損する土器が埋め込まれていた。周溝も壁の下に一周しており、柱穴も11本が確認に認められる。床面も良好であり、東側の壁近くに石棒欠損品が認められた。この住居址も褐色土中に構築されたものであり、プランの検出には困難をきわめた。

遺物（第15回・第31回・第30回・第41回・第42回）土器・石器・土製品の出土がある。

土器　床面出土の土器（15回6）とが住居内に埋め込まれていた土器（15回7）があり、出土量はきわめて多い。主に範文を地文とし沈線で文様を施す形態の土器と、吸烟系土器がその中心を占めるものであり、加賀青瓦期に比定されるものが大部分である。

石器　打石斧（31回1～6）横刃形石器（31回7～9）があり、黒耀石製石器（42回22）黒耀石製ドリル（42回23）小形磨石（42回24）が出土している。

・土製品　土器脚部（39回8・9）土器片利用の土製円板（41回25・26）が出土している。

タ) 16号住居址（第7回・第15回・第31回・第32回・第40回・第41回・第42回）

不整形な堅穴住居址であり南北5.7m×東西5.1mを計り、北側の一部は方形周溝帯北側コーナーによつて切断されている。周溝底の調査中この附近より多くの土器と焼石が注意されており、住居址石垣炉の北側に振り床された炉場部が確認され、この内部よりわずかな土器が認められており周溝より、もう一つの炉場の存在が推定された。本住居址は南側を17号址によって切断され、壁の状態及び柱穴の位置などから

推定すると2つの住居址の存在が考えられる。周溝墓域内に存在する石廻炉は、扁平自然石を使用するものであり、その中の一つは花崗岩製の石皿を利用るものであったが取り上げ時、破壊してしまった。本件住居址は複数の住居址を考えるべきであろう。

遺物（第16図・第31図・第32図・第40図・第41図・第42図）土器・石器・土製品の出土がある。

土器（第16図1・2）ともに周溝墓より北側の住居址埋土より出土したものである。石廻炉に伴う住居址よりも若干古い時期の所産と思われる。中期初頭に比定できよう。また石廻炉に伴う土器は灰陶系土器がその中心を占めきわめて多量な土器が出土している。

石器 磨石斧・敲打器を兼ねたもの（31図11）打石斧（31図12-15）尖頭器状石器（31図10）礫器（32図5～7）石錐（32図8・9）磨石（32図10）横刃形石器（32図11-13）があり、そのほか打石斧（32図1-4）石錐（32図5-8）横刃形石器（42図25-26）チャート製石ヒビ（42図27）が出土している。

土製品 土器片利用の土錐（40図7）土器片利用の土製円板（41図27-30）が出土している。

チ）17号住居址（第8図・第32図・第33図・第41図）

16号住居址を切り下す南側に存在する南北4.2m×東西4.2mのほぼ長方形の堅穴住居址である。また東側壁は方形周溝渠の主体部によって切離されている。褐色土を掘り込んで構築された住居址でありその掘込みも深く、炉址は長方形であるが炉石はすべて取りのぞかれている。主柱穴は4本であり、東側及び南側の柱穴附近に2個の大形立石が存在している。床面は良好である。

遺物（第32図・第33図・第41図）土器・石器・土製品の出土がある。

土器 土器類は多量に出土しているが、すべて破片でありそれらは第10号住居址出土のものと同種であり、加曾利中期と比較的新しい時期の所産と推定される。また小刀器（40図1-3）の出土がある。

石器 磨石斧（32図14-16）打石斧（32図17-23、33図1-5）横刃形石器（33図6-10）大形粗製石核（33図16）磨石（33図17-18）敲打器（33図19）が出土している。

土製品 土器片利用の土製円板（41図31-33）が出土している。

ツ）18号住居址（第8図・第16図・第33図・第34図・第42図）

住居址東側の約半分は水田造成時に破壊されており、正確なフランはつかむことができなかつた。炉址は小形自然石を使用する不整形の石廻炉である。床面も悪く、炉址出側には副部以上を欠損する伏せ甕が存在する。この伏せ甕は床面下に存在するものであり、伏せ甕の穿孔部には蓋器としての敲打器が存在する特殊な事例である。この発見は床面にピット状の落込みが確認されたため掘り下げたことにより注意されたものであり、張り伏など特別な施設は認められなかつた。

遺物（第16図・第33図・第34図・第42図）

土器 伏せ甕（16図3）と深鉢形土器底部（16図4）があり、この他図示していない多くの土器片が出土している。また附近的調査により紀文中期中葉前半に比定される土器も発見されている。

石器 磨石（33図20・21）敲打器（33図22）これに伏せ甕の蓋に利用されていたものである。打石斧（33図23-25）磨石（34図1）人形横刃形石器（34図2）が出土している。黒石（石質石錐（42図28）が出土している。

テ）19号住居址（第11図・第34図）

この住居址は東側を天伯1号墳西周溝によって切断され、さらに西側は用地外のため大部分が調査できていない。僅約4mを計る円形の堅穴住居址と推定され、床面は良好であった。この附近からは多くの中期中葉前半の土器が注意されている。第2号住居址と同時期と考えられる。

遺物（第34図）

土器 図示していないが中期中葉前半の土器である

石器 石錐（34図3）が出土している。

ト）19号住居址（第11図）

19号住居址の北側に存在するもので、19号址同様東側は天伯1号墳周溝によって切断され、さらに両側は道路下のため大部分が未調査である。僅約4mを計る円形の堅穴住居址と推定され、出土遺物も周溝内の調査において、住居址附近より多くの中期中葉前半の土器が注意されている。おそらく2号住居址と同時期の所産と考えられる。

ナ）土墳（第9図、第34図）

土墳は調査地区全体より発見され、その時期は住居址よりも古い所産と考えられるもの、住居址と同時期と推定されるもの、古墳構築期よりも新しいものなどに分けられる。

（第1表）天伯1号墳土墳計測表

土墳番号	形態	高さ	幅	厚さ	出土遺物	編号	七面番号	形態	幅	高さ	出土遺物	調査
1号	円 形	200cm	200cm	90cm	真刀形石錐	11号	横面	125cm	80cm	25cm		監督者
2号	両円形	115	80	20		12号	円 形	100cm	100	45		監督者
3号	長方形	80	25			13号	長方形	140cm	125	50		監督者
4号	円 形	75	70	30	▲型土器底	14号	長方形	130cm	100	50		監督者
5号	不規則形	140	100	70	▲型土器底	15号	真形	200	120	65		監督者
6号	横円形	175	130	50	打石斧・土	16号	長方形	145	75	50		監督者
7号	横円形	115	75	45	石盤	17号	横面	130	110	25		監督者
8号	長方形	150	90	45	打石斧	18号	円 形	85	85	45		監督者
9号	長方形	115	90	20		19号	円 形	120	110	55		土質円板
10号	長方形	115	90	20								

4. 弥生時代の遺構

ア）方形周溝墓（第10図）

約西側半分をしたのであり、東側半分は未調査である。墓域は南北14m×東西約16mを指定できるものである。南側溝幅210cm、深さ150cm、西溝幅190cm、深さ110cm、北溝幅230cm、深さ160cmを計るもののあり、さわめて深いものである。また主体部も大きく幅250cm長さ推定4m、深さ110cmを計るものであ

る。この周溝墓は褐色土より掘り込んで構築するものであり、溝底面は黄砂質土にまで達しており主体部に落込土はこの黄砂質土が認められる。周溝墓底中や主体部内からは弥生時代の遺物の発見はまったく認められない。下伊那地方では多くの発見例があるが溝の深さは天伯A遺跡の周溝墓ほど深い事例は認められない。主体部直上に黑色土がわずかに認められる事実よりマウンドの存在が推定されるものである。

5. 古墳時代の遺構と遺物

1) 天伯古墳

下伊那史第3巻によると、天伯神社裏手の水田中に径9m、高さ2.5m程の円墳が存在し明治20年ころ確認され、その後水田耕作中に管玉、切子玉などと多数の土器類が発見されている。今回の調査時点ではまったくその位置を知ることができなかつたが、調査によって天伯神社社務所西に1基、さらに社殿裏手に1基計2基の古墳が存在した事が判明した。

ア) 天伯1号墳(第11回)

天伯神社社務所西側に発見された徑18mを計る円墳であり、墳丘はまったく認められなかつたが、東側及び西側の周溝と石室の痕跡を見ることができた。周溝は東側で幅3.6m、西側で2mを計り周溝内には粘質黒色土が落込しており、その上面には蓋石が多く落下していた。また周溝は北側では発見できず古墳を一周したものではない。石室は底底部の痕跡が残るのみで南に開口するもので長さ約10m幅2mと推定されるものであり、南側石室開口部には周溝は認められなかつた。石室東側部は水田の土手に石室に使用されていたと考えられる自然石的横溝が存在し、かつては大形な横穴式石室が存在したものであらう。

遺物 (第16回、第40回) 須恵器、土師器、水晶製切子玉、管玉などが発見されている。

土器 須恵器(第16回6、7)かなり大形な須恵器であり同図6は底部を欠損するもので器面にはタタキ目が認められる。同図7は底面以上を欠損する大形な壺で器面は自然釉が認められる。さらに环形土器が焼成時付着しておりそれを丁寧に取りのぞいた痕跡が認められる。これら2点の須恵器は東側周溝の蓋石下部より出土したものである。土器部环形土器(16回8)は内面黑色処理されており西周溝の北側より出土したものである。また須恵器長颈瓶3個体と土器部环形土器2個体分ほどは、西周溝南側より出土している。ここより出土した土器部壺は底部近くにわずかな有段をもち、口縁部は大きく外側に開く形態を示し、中央追査で発見された住居址出土の中に認められるものもあり、いずれも内面は黑色処理されている。石室内より水晶製切子玉(40回9)と西側周溝内より管玉半欠品が出土している。(40回8)

イ) 天伯2号墳

天伯神社社殿裏に存在する徑約10m前後の円墳であり、1号墳の北側に存在する。1号墳の西周溝は2号墳の西側周溝に接するごとにまで接近して作られてきた。2号墳東側周溝は水田造成時にかなり消されたらしく幅70cm、深さ約30cm前後が残るのみであった。西側周溝は道路下に伸びており幅1.7m、深さ35cmを計るものである。両古墳とともに南側では周溝が存在しない、2号墳も石室は南開口と推定されるがその位置は不明である。出土遺物はまったくない。

6. 遺構・遺物

器台形土器(16回5)と考えられるものであり、第17回から第22回に示した拓影は本遺跡褐色土より出土した土器類でありその出土量は多量なものである。口縁部が波状を呈し口縁部表面両面に織文を施し西日本系土器の一群(17回1~17)があり、この種の土器は丹赤色である。船形土器に比定されるものであろう。これに対し太い竹管文を主体とする土器群(17回18~27)が認められる。平出三脚人足される土器口縁部(17回28~39)の出土も多く、両形土器口縁部及び網部(18回1~39、19回1~7)がある。網部下半のビレ部周辺に認める所縫正規文を有する部分(19回8~14)がある。さらに2号住居址、19号、20号住居址に伴う中期中葉前半の土器群(19回15~33、20回1~14)がある。また縄内系土器(20回15~26、21回1~32)が認められ、器面にはく割文が明顯に認めることができ、縄文を施す(21回22~26)ものも存在する。後期期の内式土器に比定される一群(22回1~21)がある。ここに示した土器のはかに多くの土器が出土している。住居址出土の土器は主として加曾利E期の土器であり、その中に多くの灰陶系土器の存在が認められている。

石器類は磨片石(35回5~9)打石斧(35回1、14~21)嵌打器(35回4)石皿(35回2)砥石(35回3)横刃刀形石器(35回10~13)がある。そのほか打石斧(36回1~24、37回1~10)があり、石錐(37回11~19)がある。大型粗製石と(38回1)横刃刀形石器(38回2~8)磨石(38回9~14)が出土している。石鑿(42回30、31、33~35)があり、ドリル(42回36)スクレーパー(42回38)異形石器(42回37)石匕(42回39)と小形磨石群の刃部欠品(42回32)の出土がある。

土製品は土偶頭部(39回10)と土偶頭部(39回11)脚部(39回12)があり、土器片利用の土製円板(40回21~29)がある。この他の化物としてタケの出土がある。

その他の遺物として灯明皿(40回10)の出土がある。また綠釉陶器、青磁の発見もある。

第2表 天伯A遺跡遺物出土土器一覧表

出土地番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	褐色土	周溝内	計		
1) 石斧	17	5	4	7	17	17	37	4	3	32	13	1	14	9	19	27	9			90	12	336			
2) 磨石斧	2	1		6	1	2			1	3				1	1	3				4	2	27			
3) 打石斧																							11		
4) 磨石	4			10	14	3	1	12	2		8		6	7	8	4			17	2	92				
5) 土偶頭部	2						1	1															4		
6) 土偶頭部							1																1		
7) 磨石							2	3						1	1								7		
8) 磨石							1	3						2									2		
9) 磨石							1	1	1	1				1			3	1		5	2	18			
10) 磨石							1	1	1	1	1			2	5	1		7	1	30					
11) 磨石							1	1	1	1	1	1		2	1							8			
12) 磨石							1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1			5			
13) ドリル							1																2		
14) 6枚							1	1						1	1								4		
15) スクレーパー							1	1						1									3		
16) 灯明皿							1																1		
17) 緑釉陶器														4	3	1							8		

III. ま と め

本遺跡は縄文時代早期から中世にかけての遺物が発見されている。特に縄文時代中期の住居址が多く発見され、しかも加曾利二期の時期で多くの住居址が切合関係にあり、その土器様相にも注意すべき方を示している。調査区においては加曾利二期を主体とするものであるが、中期初期の土器が多く発見されており、未調査区には、この時期の住居址が存在するものと推定される。また中央道用地内においては、前期より中期初頭の土器も発見されており、天伯A遺跡と天伯B遺跡との間は約150m程度はなれているが、この中に縄文時代の遺構が存在する可能性が充分考えられる。下伊那における古文中期特に加曾利二期の集落址は最も多く発見されており、同時期の住居址群が明確に切合関係にあり縦断的考察を完結する時期に来つたと思われる。また中期初期土器群の天竜川流域におけるあり方に注目しなくてはならない。天伯A遺跡は集落址の一部を調査したものであり、集落址の複数の考察や土器様相などは、積極的に論ずる事はできないが少なくとも当遺跡の加曾利二期の時期における土器のあり方より3~4期に分類することが可能と思われる。いずれにせよ当地区における縄文時代の編年研究は、近年その資料も増加しており近い将来それが達成されることと思う。また本遺跡出土の石器石材は種々なものが認められるが、主として天竜川でそれを容易に求められるものもあり、硬砂岩、砂岩、綠泥岩、などがある。また千枚岩、安山岩などと石壁で使用されている石垣、特殊なものでは法來寺系赤岩の出土が認められている。石器類については比較的その出土量は少い。当地方におけるこの時期の住居址からは多量な石器類が出土する例が大部分である。本遺跡からさきわめて少量しか出土していない。いかなる生活環境の変化がそこに存在したものか大きな問題となる。さらに打石斧頭にあっては刃部が磨滅しているものが多く認められる。13号住居址からは石錐が多く発見されており、土器片利用の土錐の存在にも注意する必要があろう。こうした生活用具からみると、天竜川の段丘上に存在する遺跡群とは若干そこに変化を認めることができる。

今回の調査で弥生時代後期と推定される方形周溝墓が発見され、中央道用地内の山岸遺跡、天伯B遺跡で弥生後期の住居址が多く発見されており、集落址の一部が明らかにされている。これらから推定すると周溝墓は集落より西方に位置するものであり、集落と墓地は約100m前後はなれて存在している。また周溝墓は集落よりわずかに高所に存在しており、集落と墓地を考える時注意すべき位置にある。

天伯古墳の存在は以前より知られていたにもかかわらず、その正確な位置や規模は不明であり完全に消滅していた古墳であった。今回の調査でここに古墳の存在を知る事に主力を置いていたのであるが、新たにもう1基の古墳が存在した事実を知ることができた。これらの古墳はともに周溝を有し、石室が存在する1号墳は比較的大形の円墳であったことが判明した。マウンド上には蓋石も存在した事実が確認されたのである。2号墳は1号墳よりもわずかに小形であるが1号墳同様円墳である。これら2基の古墳はほとんど段丘先端部に位置するもので、2基とも接して存在していたものである。1号墳からの出土遺物より見ると天伯B遺跡で発見された集落址とはほとんど同時期のものであり、6世紀末より7世紀代に築造されたと推定できる。また段丘先端部にはいくつかの古墳が点々と存在し、山岸、天伯B両遺跡で発見された集

落址との強い関係を察し得る。

天伯A遺跡の調査においては、様々な問題点がござっているが、今後の研究課題として機会を得て論じたいと思う。ここでは調査によって得られた結果を報告するに止めておきたい。

鹿町天伯A遺跡発掘調査組織

1. 天伯A遺跡緊急発掘調査委員会

福沢 忠治 鹿町教育委員長

下島 節 鹿町教育長

森本 謙男 鹿町教育委員

岡島 一郎 *

片桐 正人 *

2. 調査団

調査指導 今村 喬司（長野県考古委員会指導主事）

調査主任 速報部麻呂（日本考古学会会員）

調査員 今村 正次（長野県考古学会員） 片桐 孝男（長野県考古学会員）

松村 全二（長野県考古学会員） 小松 望（駒ヶ根中学校）

協力 鹿町文化財審議会委員、本島宏一・倉田順市・塩沢 兼・渡辺 茂

下伊那教育会考古学委員会

下伊那農業高等学校園芸部

鹿中学校園芸クラブ生徒会主

鹿町切石区長 平沢 清 駒ヶ根区長 村沢忠男

分館長 奥村 健・熊谷理一・木下静夫

作業協力員 熊谷 三男 村沢 広 熊谷 律 村沢 孝子 田中 星久

佐々木初子 池戸千恵子 村井 良子 平沢 光江 大竹 幸輔

中島 徳恵 伊藤 千春 坂下やすみ 松尾 藤子 松尾 金市

夏日 敏 德藤つたえ 齋山まちえ 平沢イワエ 代田清知子

代田 重 松尾 昭子 吉川 きみ 高橋 利江 伊藤 桂子

井上 たか 並田 千代 長谷部八千代 前沢 好美 花井八千代

矢沢 つる 伊藤 清子 遠藤みさか

3. 事務局

事業責任者 加藤文三郎（町長） 事務局 川井 重明（庶務係長）

下島 節（教育長） 松下 信子（主事）

沢柳 房子（主事） 小西 盛登（書記）

東 明男（社会主事）

おわりに

無計画な地域開発や観光開発によって、文化財や自然破壊が進行しつつあることは、大変残念なことです。

埋蔵文化財は、私たちの達い祖先が、冷酷な自然や外敵と闘いながら生きてきた、血と涙の歴史である上で生活している私たちは、真に生きているよろこびを感じずにはいられないと思います。

したがって、こうした文化財は、現状のままを大切に保存する責任があります。しかしながら、数万を経過した今日の課題として、生きるために緊急に解決しなくてはならない諸問題があり、やむを得ず何の緊急発掘調査となり、ここに記録として保存するとともに、広くみなさんにその全容を明らかにしました。

この報告書の作成にあたっては、県教育委員会指導主事の今村善典先生の全面的な御援助をいただき、郡町在住の遠藤藤麻呂先生が中心となり、今村正次・片桐幸男先生の手もわざわせました。

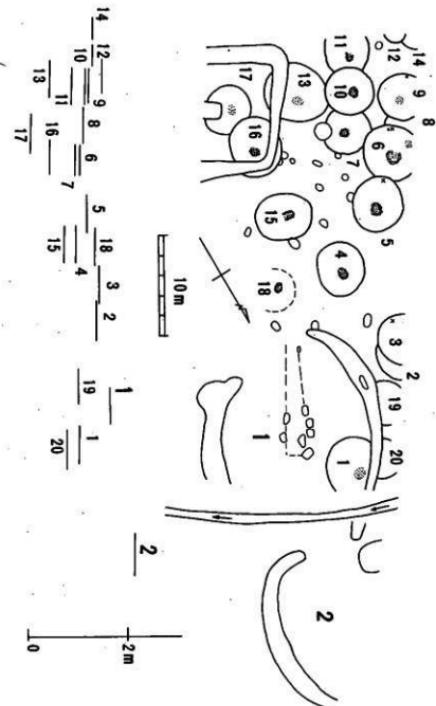
とくに遠藤先生には、発掘時から御両親も努力を提供していただき、御一家をあげて御協力をいただきました。また今村善典先生には、限られた予算の中で最大の成果をあげるために、種々御骨折と御指導いただきました。更に今村正次先生は、発掘現場では作業に当っていただいた皆さんのチームプレーのとなっていました。片桐先生は若い情熱をぶっつけいただきました。

こうして、多くの先生方や皆さんの御協力によって、発掘調査ならびに報告書が完成したわけで、厚御礼申しあげます。

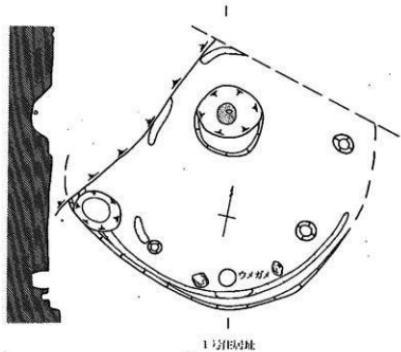
この報告書が、広く研究のため役立てていただくとともに、先人が残した貴重な遺産を大切にしようという意識が、この冊から広がっていくことを願うものです。

昭和50年3月20日

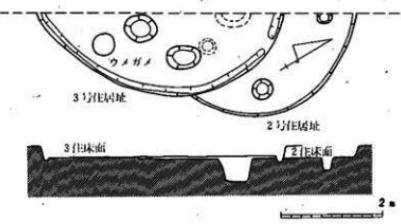
長野県下伊那郡西町教育委員会



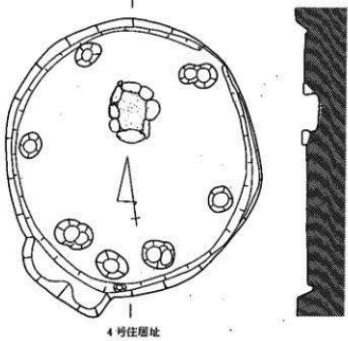
第1図 天伯遺跡遺構配置図及び床面高低表



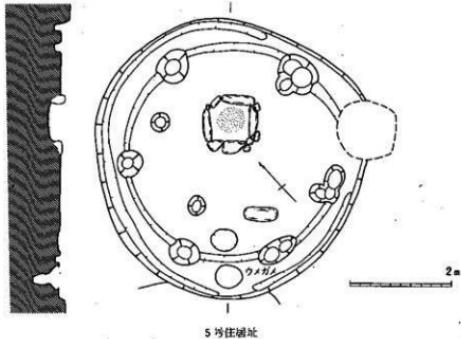
1号住居址



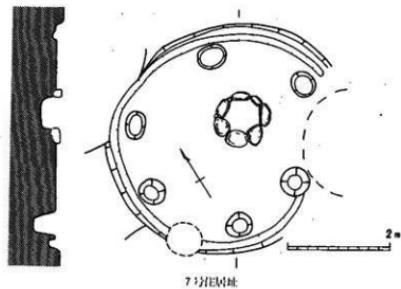
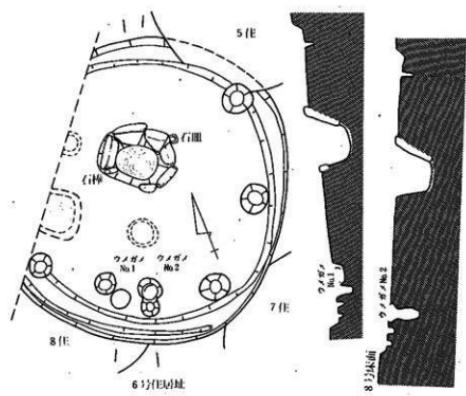
第2図 天伯A遺跡1号～3号住居址 (1:80)



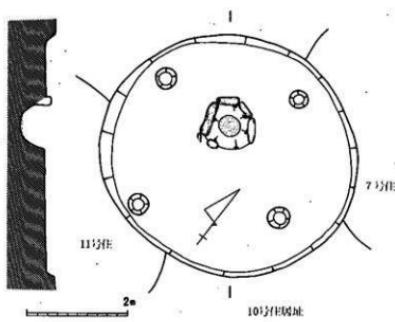
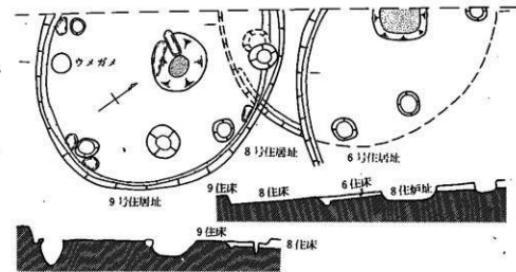
4号住居址



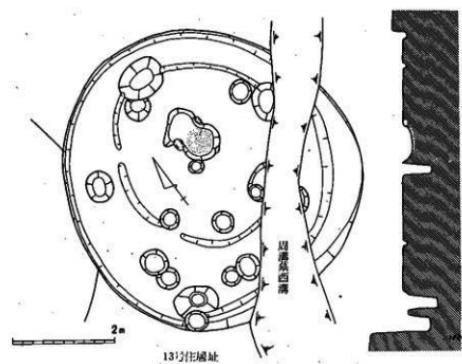
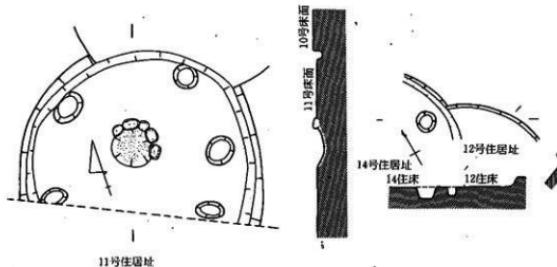
第3図 4号、5号住居址 (1:80)



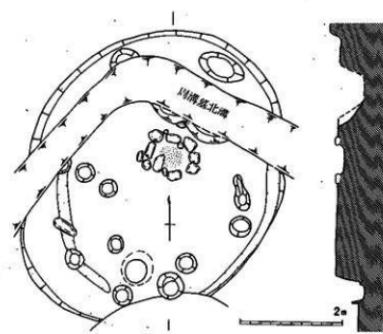
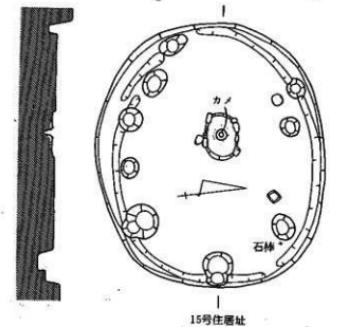
第4図 6号、7号住居址 (1:80)



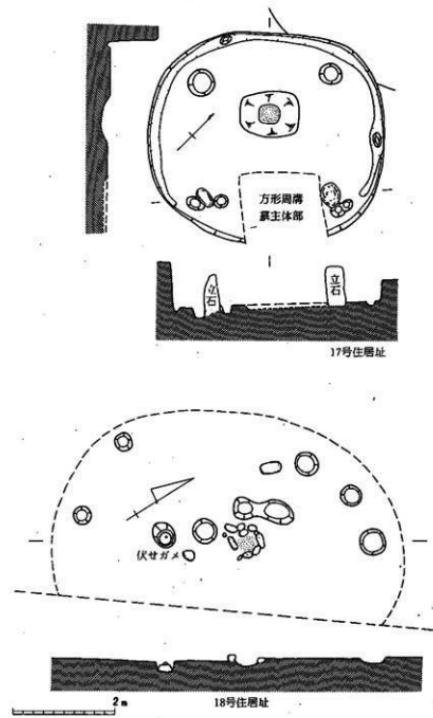
第5図 8号、9号、10号住居址 (1:80)



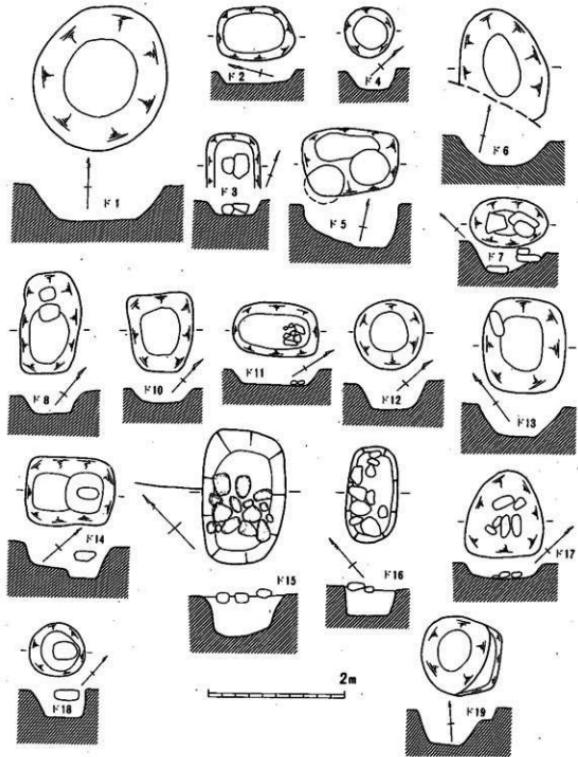
第6図 11号, 12号, 13号, 14号住居址 (1:80)



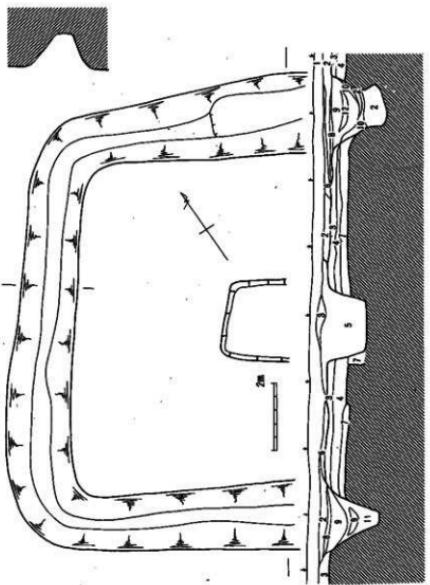
第7図 15号, 16号住居址 (1:80)



第8図 17号、18号住居址 (1 : 80)

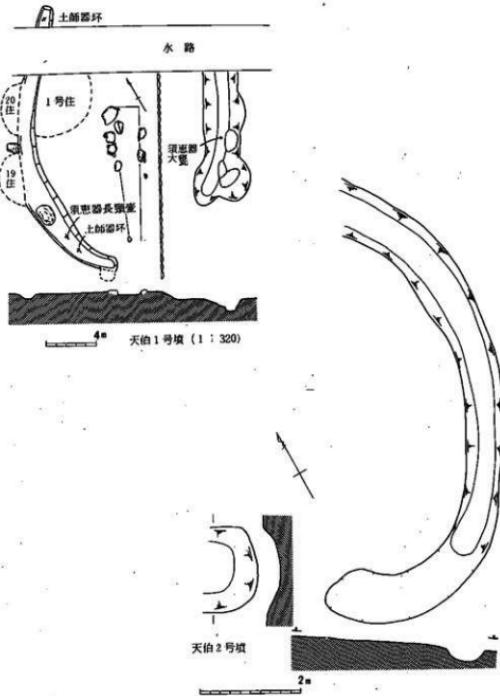


第9図 天伯A遺跡土壙 1号～19号 (1 : 60)

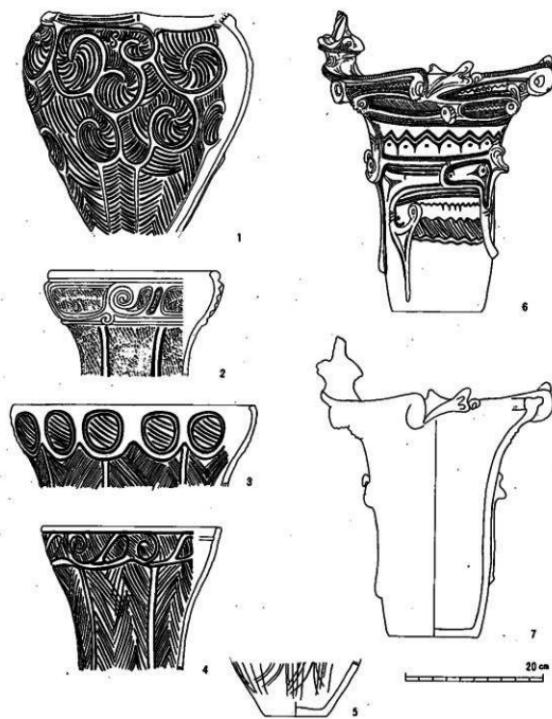


第10圖 天伯A遺跡方形陶器墓 (1:60)

- 1 拼 作 土
- 2 粉 土
- 3 黑 色 土
- 4 红 棕 色 土
- 5 黄 棕 色 土
- 6 淡 棕 色 土
- 7 黑 滤 砂 土
- 8 淡 滤 砂 土
- 9 红 滤 砂 土
- 10 棕 黑 滤 土
- 11 棕 黑 滤 土
- 12 红 滤 土

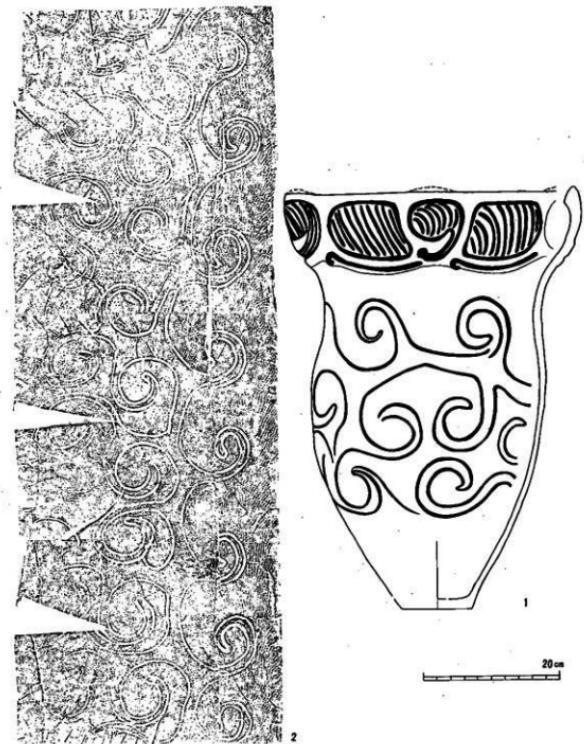


第11圖 天伯 1號, 2號古墳 (1:80)



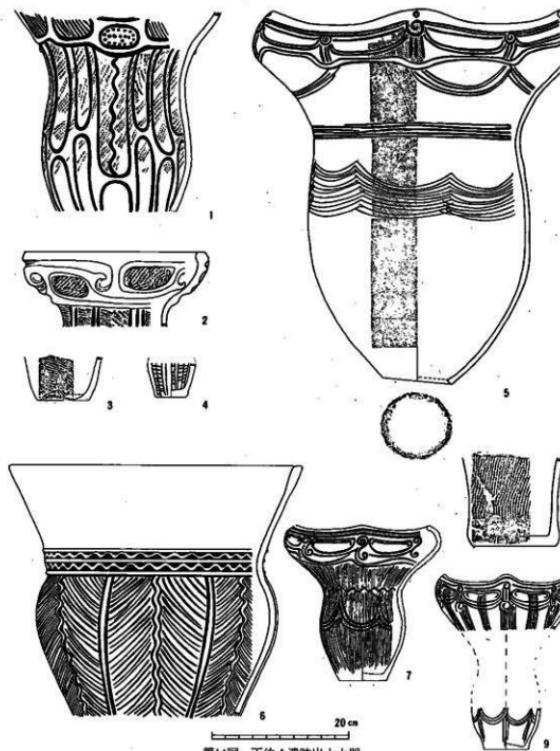
第12圖 天伯A遺跡出土土器
1-2 1号住居址 3-5 3号住居址 6-7 2号住居址

-30-



第13圖 天伯A遺跡出土土器 3号住居址出土

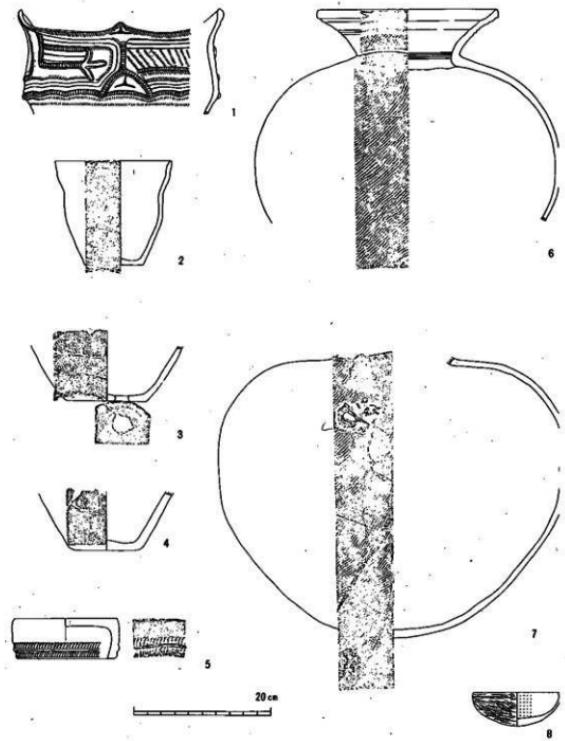
-31-



第14圖 天伯A遺跡出土土器
1~4 6号住居址 5 5号住居址 6~9 7号住居址



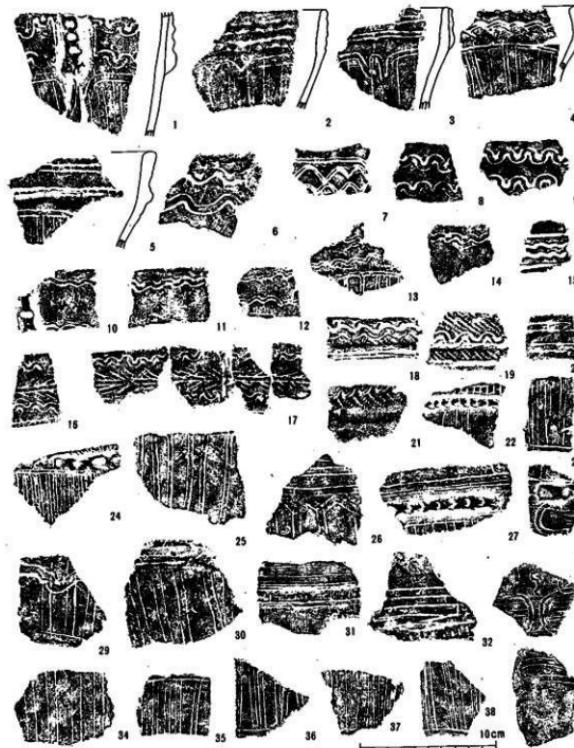
第15圖 天伯A遺跡出土土器
1~2 9号住居址 3 10号住居址 4~5 13号住居址 6~7 15号住居址



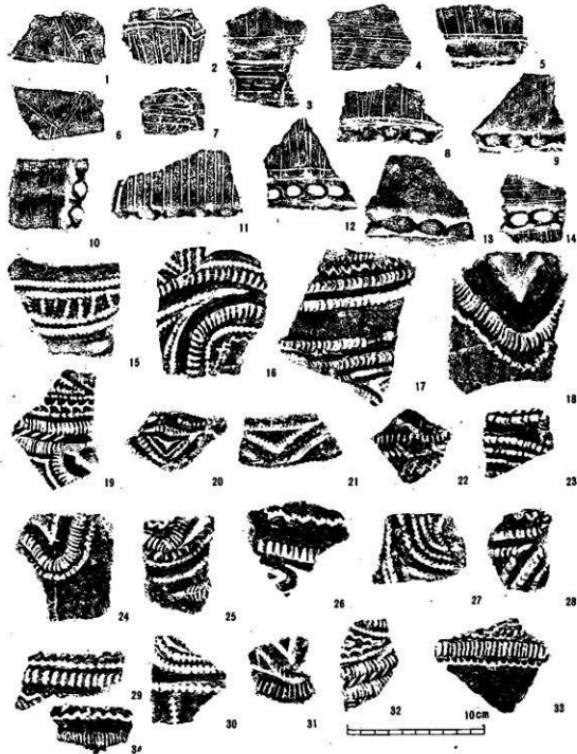
第16圖 天伯A遺跡出土土器
1・2 16号陶片。3・4 18号陶片。5 通體外壁。6—8 天伯1号出土。



第17圖 天伯A遺跡出土土器



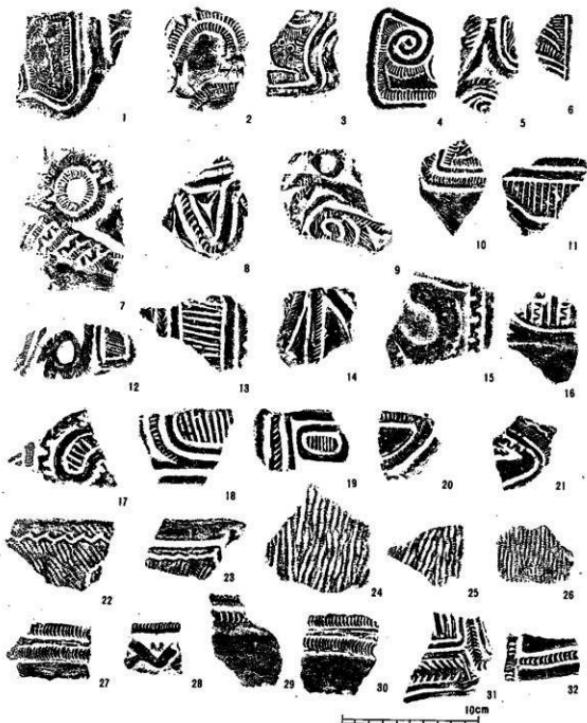
第18图 天伯A遗址出土土器



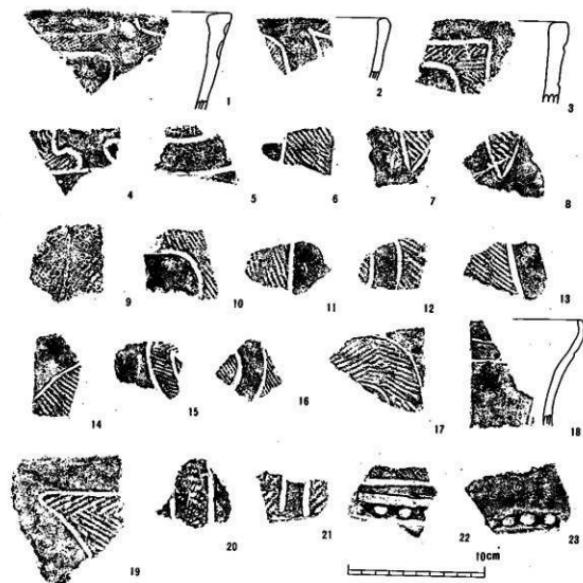
第19图 天伯A遗址出土土器



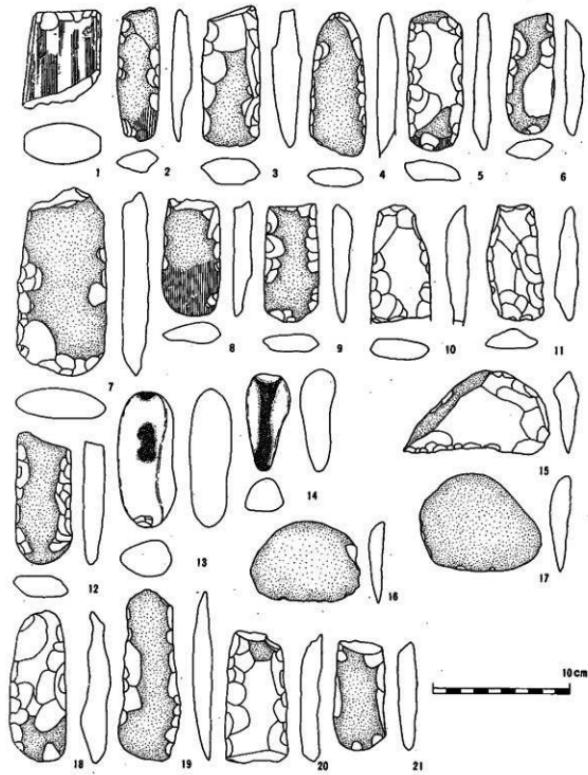
第20图 天伯A道路出土土器



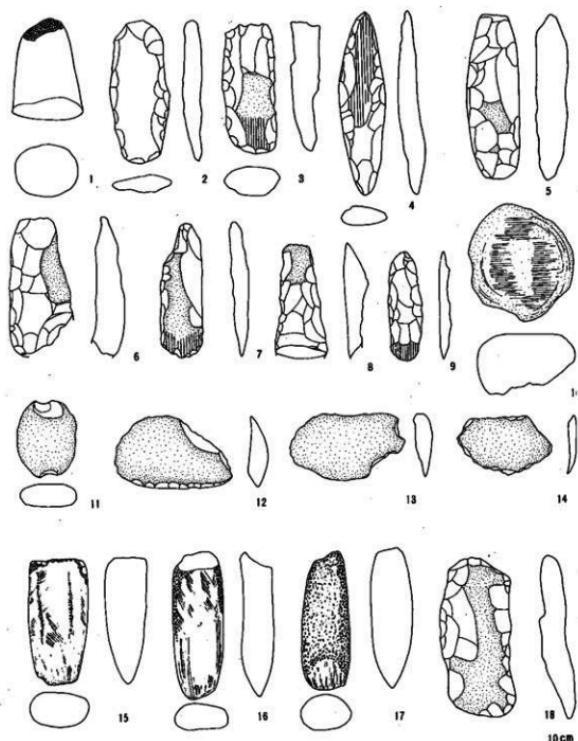
第21图 天伯A道路出土土器



第22图 天伯A道路出土土器

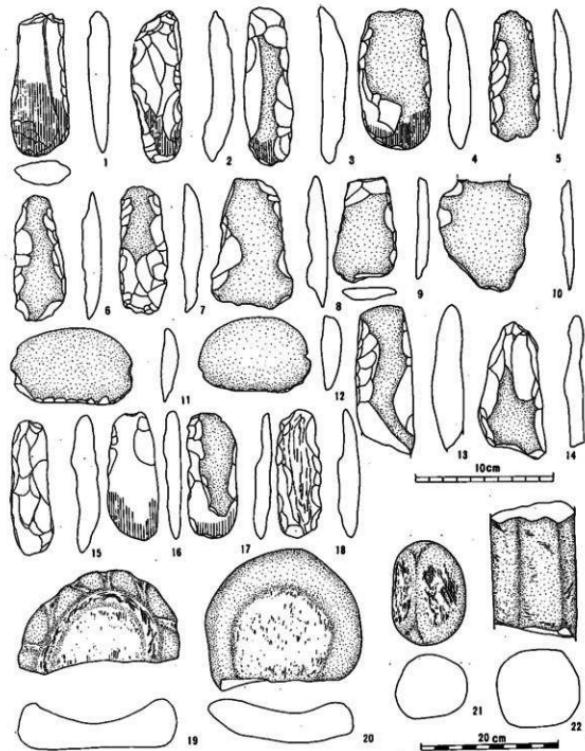


第23图 天伯A道路出土石器 1~17 1号住居址出土，18~21 2号住居址出土



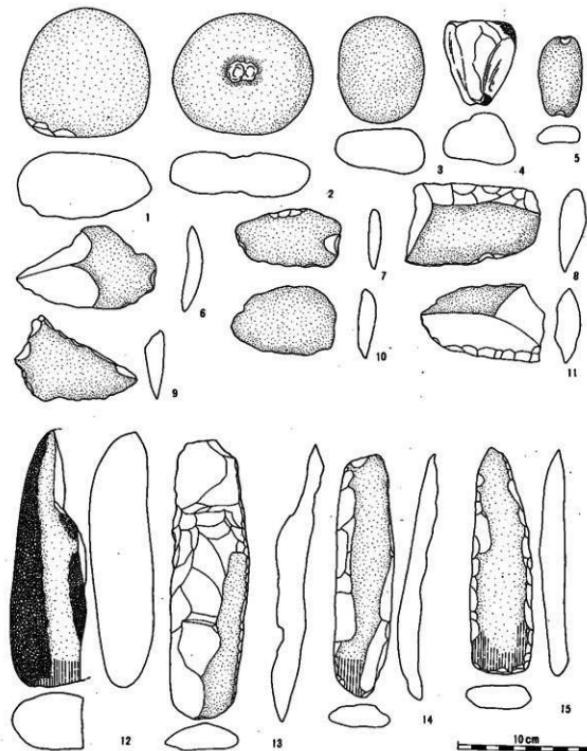
第24図 天伯A遺跡出土石器
1-3 3号住居址 4-14 4号住居址 15-18 5号住居址

-42-

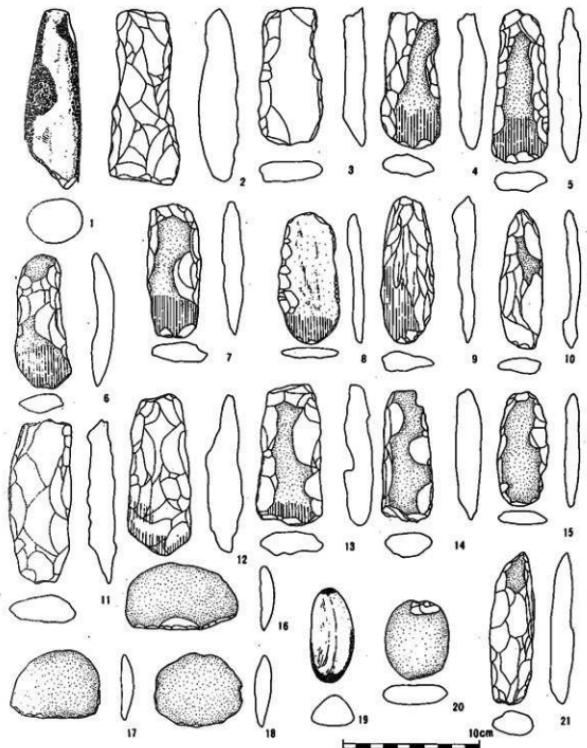


第25図 天伯A遺跡出土石器 1-12 5号住居址 13-22 6号住居址

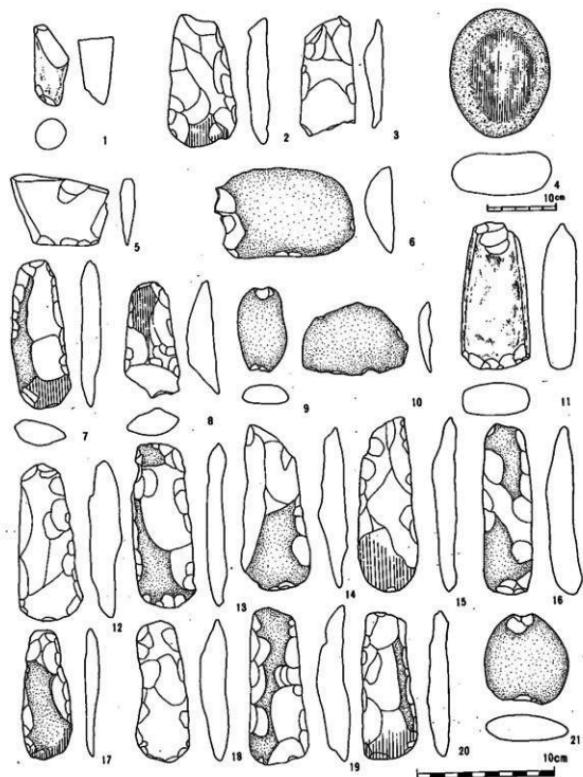
-43-



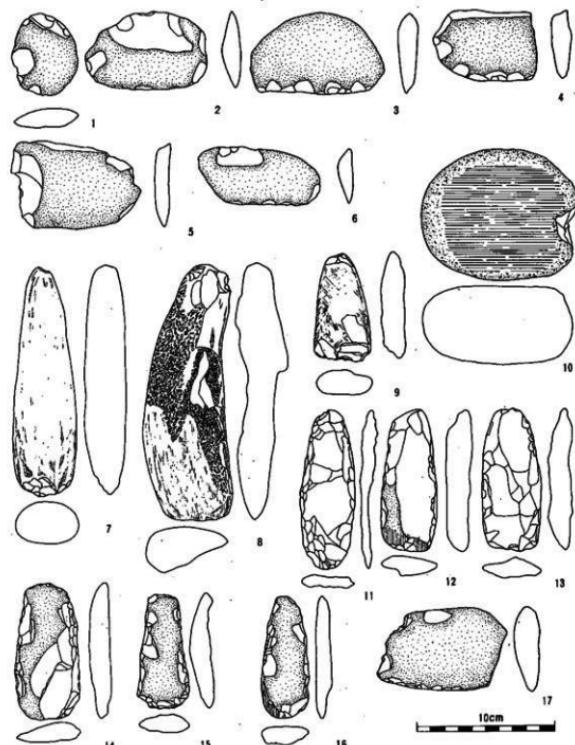
第26図 天伯A遺跡出土石器 1-11 6号住居址, 12-15 7号住居址



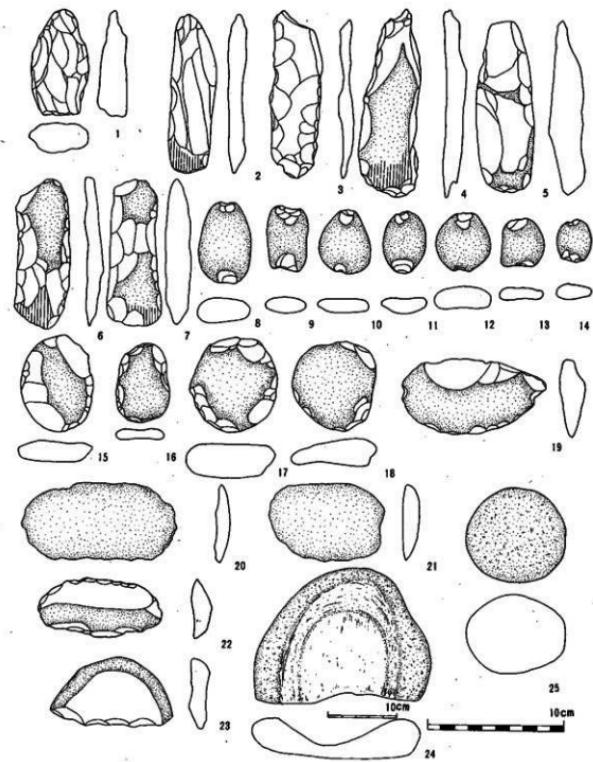
第27図 天伯A遺跡出土石器 1-21 7号住居址



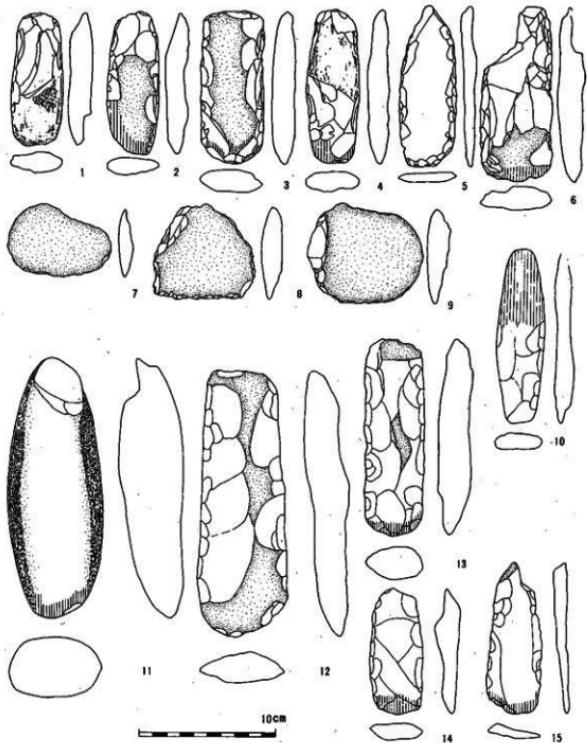
第28圖 天伯A遺跡出土石器 1—6 8号住居址, 7—10 9号住居址, 11—21 10号住居址



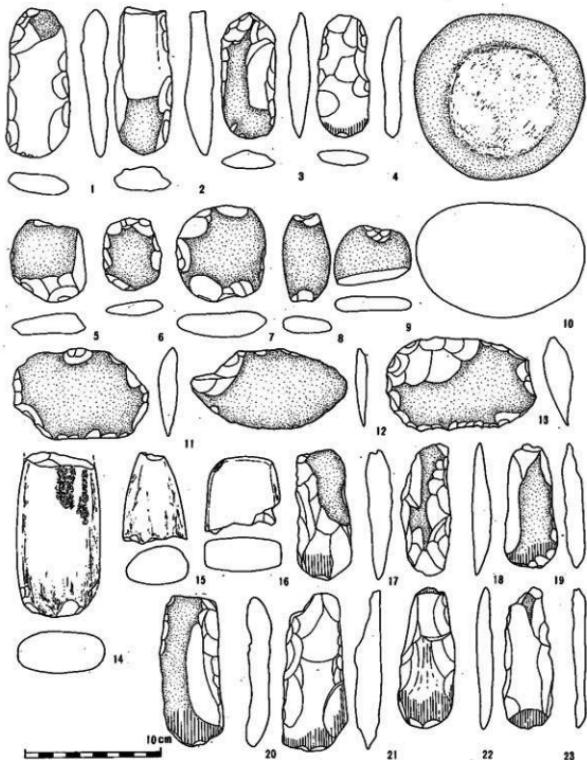
第29圖 天伯A遺跡出土石器 1—6 10号住居址, 7—17 11号住居址



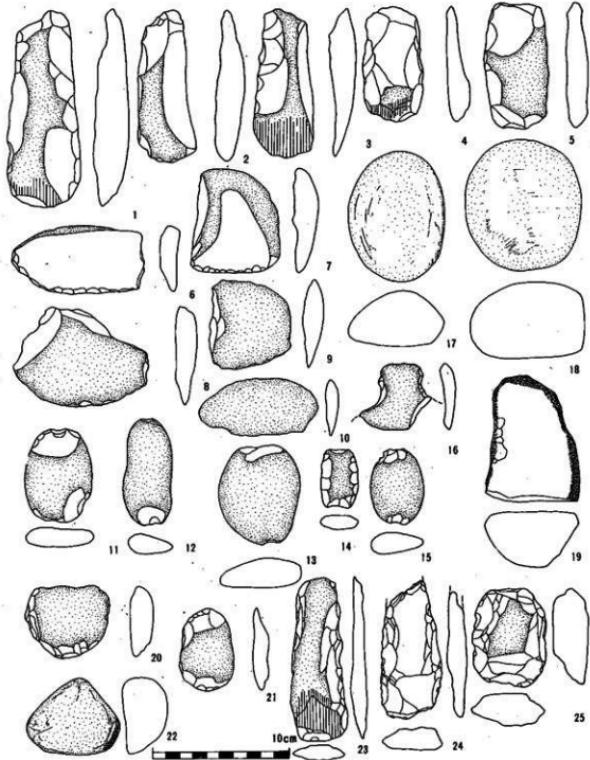
第30圖 天伯A遺跡出土石器 1~25 13号住居址



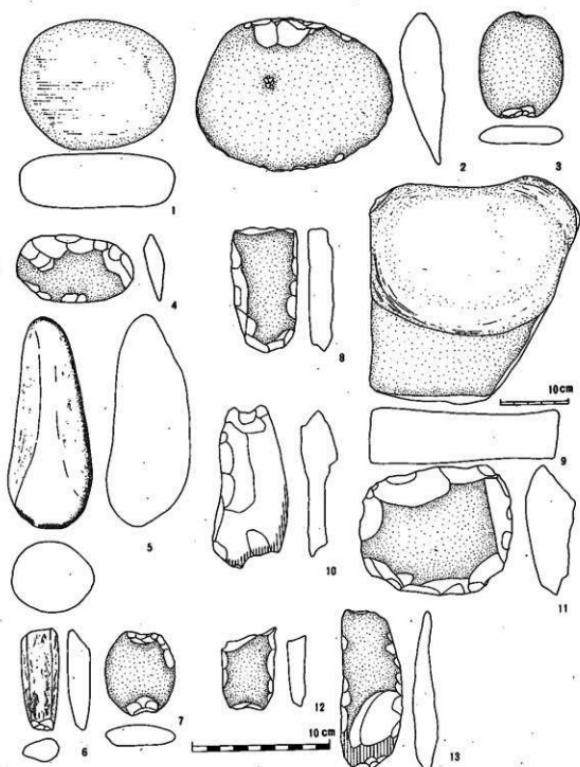
第31圖 天伯A遺跡出土石器 1~9 15号住居址, 10~15 16号住居址



第32图 天伯A道路出土石器 1—13 16号住居址, 14—23 17号住居址

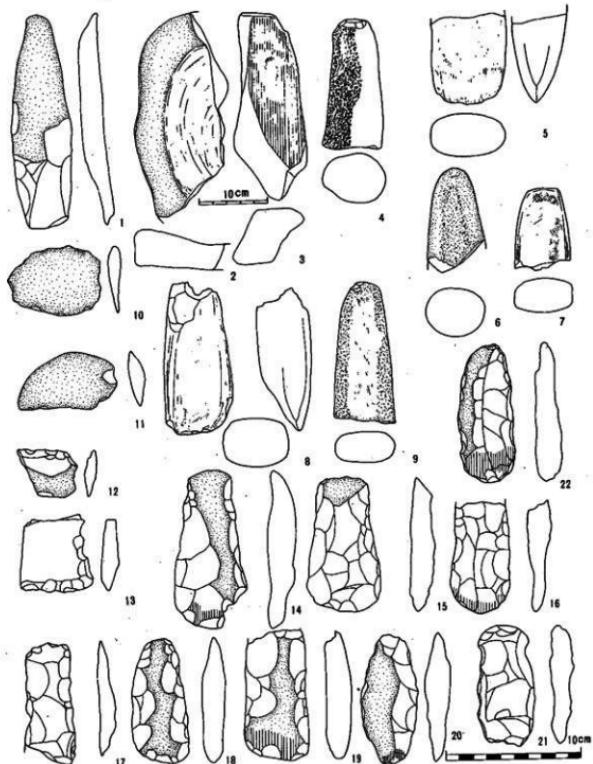


第33图 天伯A道路出土石器 1—19 17号住居址, 20—25 18号住居址

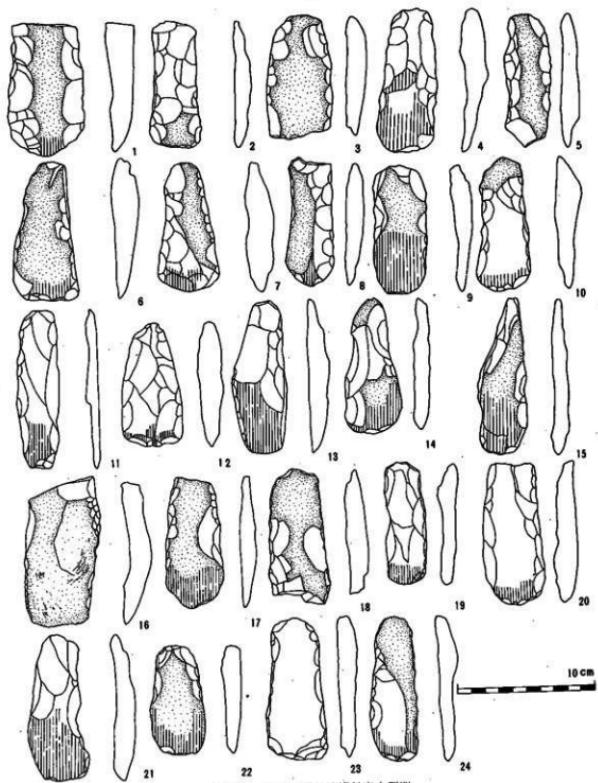


第34圖 天伯A遺跡出土石器

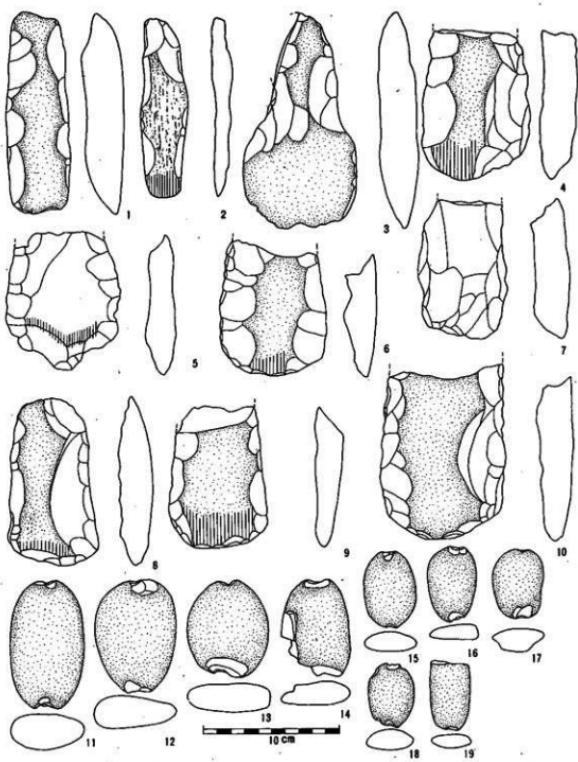
1~2 18号住居址。3 19号住居址。4 土墳1号。5~7 土墳5号。8 土墳6号。9 土墳7号。10~13 土墳8号



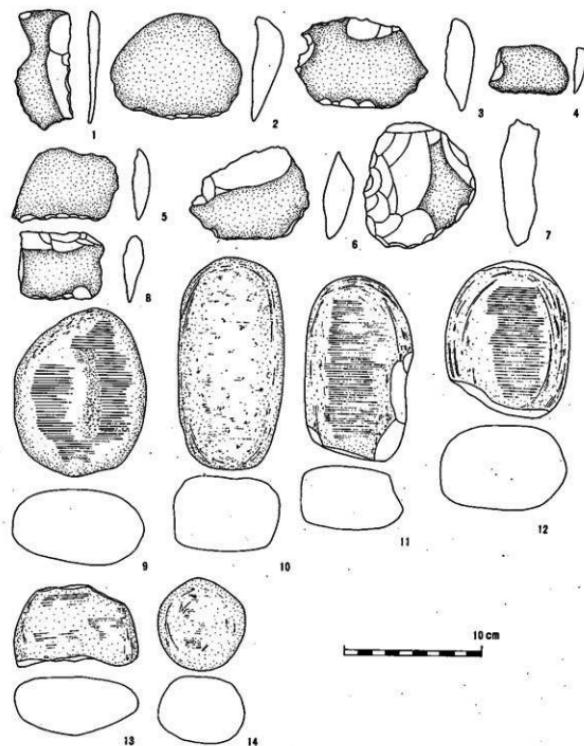
第35圖 天伯A遺跡遺構外出土石器



第36图 天伯A遗址遗物出土石器

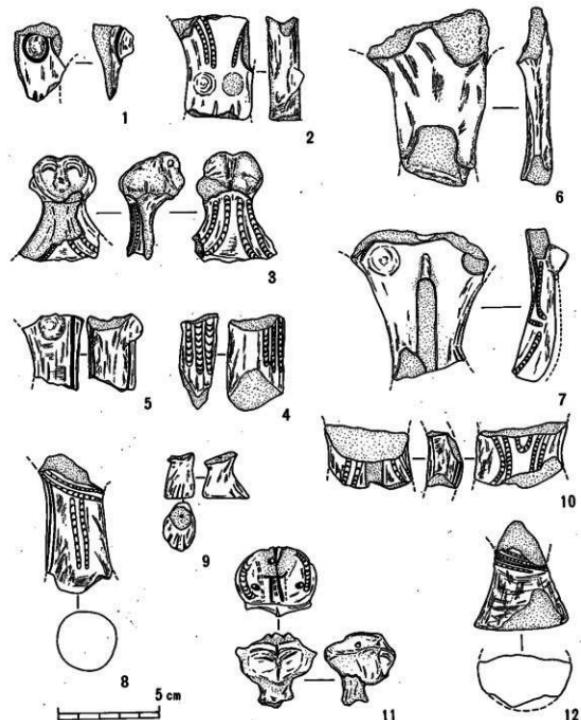


第37图 天伯A遗址遗物出土石器



第38圖 天伯A遺跡遺構外出土石器

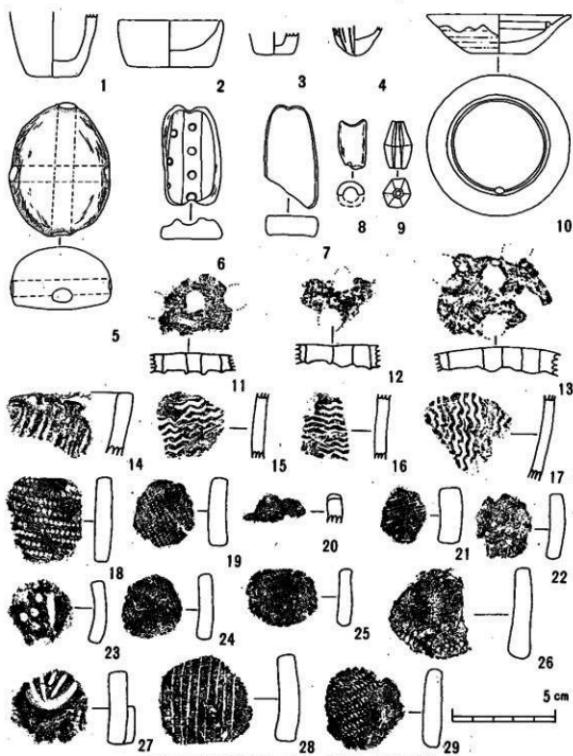
- 56 -



第39圖 天伯A遺跡出土土製品

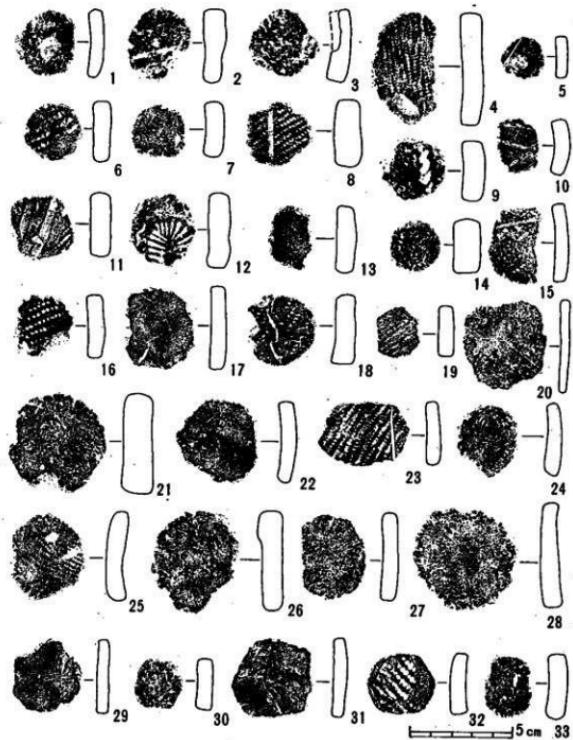
1-4号住居址, 2-3 5号住居址, 4-7 9号住居址, 5-6 10号住居址, 7-13号住居址,
8-9 15号住居址, 10-12 遺構外出土

- 57 -



第40圖 天伯A遺跡出土土製品：石製品，押型文土器

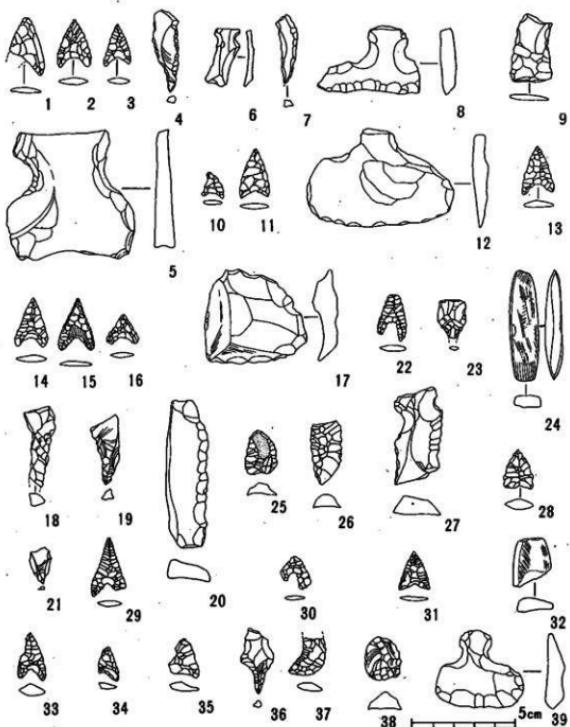
1—3 17号住居址。4 土鍤5号。5 土鍤6号。6—9 18号住居址。8—9 天伯3号窯出土。
10 道標外出土。11—12 6号住居址。13 19号住居址。14—17 押型文土器。18 土鍤6号。
19 土鍤6号。20 土鍤18号。21—29 道標外出土。



第41圖 天伯A遺跡出土土製圓盤

1—4 國色土。5 1住。6—3住。7—5住。8—9 7住。10—13 10住。14—17 11住。
8—24 12住。25—26 15住。27—30 16住。31—33 17住。

図 版

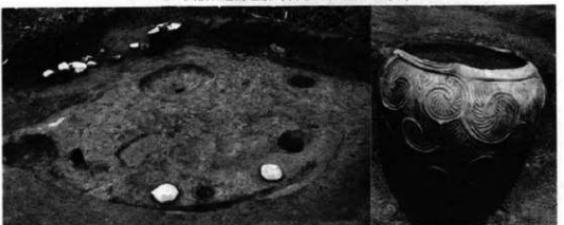


第42回 天伯A遺跡出土石器

1-5 1号住居址、6-2号住居址、7-8 5号住居址、9-8号住居址、10-12 10号住居址、
13-11号住居址、14-21 13号住居址、22-24 15号住居址、25-27 1号住居址、28 18号住居址、
30-39 這樣外出土



1. 天伯 A 道跡遺跡 (中央の森の近くが道跡)



2. 1号住居址

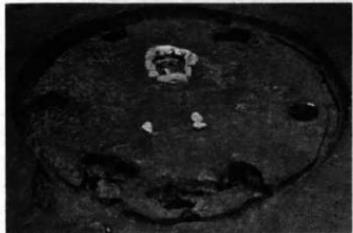
3. 1号埋甕



4. 手前 2号住、前方 3号住居址

5. 3号住埋甕上面

6. 3号住埋甕



7. 4号住居跡



8. 4号住居跡



9. 4号住入口部



10. 4号住土偶



11. 5号住居跡



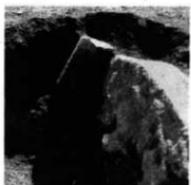
12. 5号住埋甕



13. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11号住居跡



14. 6号住居跡



15. 6号住炉石使用の石棒



16. 6号住周溝内の底部穿孔土器



17. 6号住埋甕



18. 6号住炉石に接する石皿



19. 7号住居址



20. 7号住居址出土土器



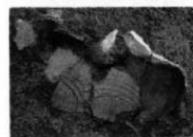
21. 7号住居址出土土器



23. 9号住居址の集石



25. 9号住居址出土土器



24. 9号住居址出土土器



27. 10号住居址



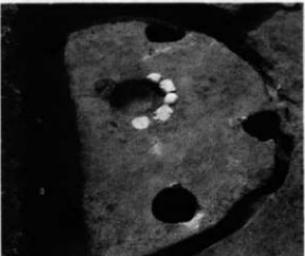
26. 10号住居址



28. 10号住居址出土土器



29. 11号住居址



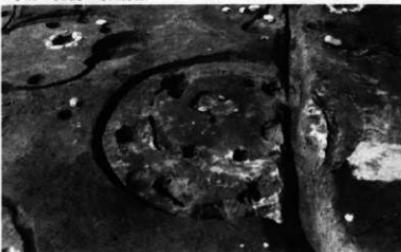
30. 11号住居址



32. 13号住居址上面の集石



31. 手前12号後方14号住居址



33. 13号住居 (溝は方形周溝底西溝)



34. 15号住居址



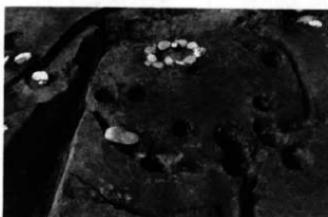
35. 15号住居址



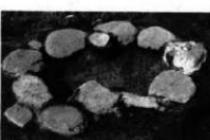
36. 15号住居址内部の甕



37. 15号住出土器



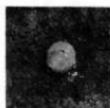
38. 16号住居址



39. 16号住居址



40. 17号住居址の立石
(立石の間は周溝基底部)



45. 土甕 No. 6 の土甕



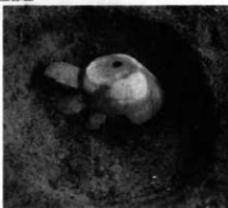
41. 17号住立石



42. 18号住居址



43. 18号住セガメ



44. 18号住セガメ



46. 方形周溝墓



47. 周溝墓南溝断面



48. 周溝墓南溝



49. 周溝墓北溝



50. 周溝墓北溝断面



51. 周溝墓主体部断面



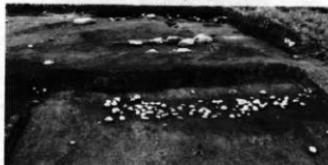
52. 天伯 1 号墳残存石室 (南より)



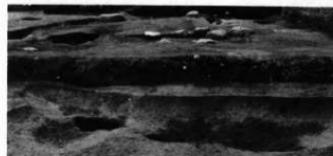
53. 天伯 1 号墳残存石室 (北より)



54. 天伯 1 号墳周溝上の落下葺石



55. 天伯 1 号墳周溝上の落下葺石



56. 天伯 1 号墳周溝 (東より)



57. 周溝内出土周溝器



58. 天伯 2 号墳周溝



59. 天伯A遺跡遺構群 (北より)



60. 住居址群



61. スナップNo.1 いいものを出すぞ!!



62. スナップNo.2 住居址の調査



63. スナップNo.3 遺物の取り上げ (右今村正次調査員)



64. スナップNo.4

町長(左) 教育長(中) 助役(右) の現地視察



65. スナップNo.5

教育長さんの説明 (左、加藤町長)

下伊那郡那町天伯A遺跡

—縄文中期集落址・方形周溝墓・古墳—

昭和50年3月15日 印刷

昭和50年3月20日 発行

発行者 下伊那郡那町教育委員会

印刷所 松本市筑摩3270
電算印刷株式会社
電話 054329 (代表)

(非売品)